

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (12) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (12) : Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886~1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (11) (都留文科大学研究紀要第88集、2018年10月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』 第三巻 (第4編) の「2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」(その2) の訳出と検討を行なう。

2. 小論の構成について

小論Ⅱ. は、『パイデア』 第三巻 (第4編) の「2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」(46p ~70p) の中間部の訳出と<注記と考察>で構成する。なお訳文の項の区切りは、ドイツ語版にはない、英訳版で設定された1行空けの区切りを使っている (英訳版における区切りは、ハイエットとイェーガーとが協議して設定したものと推量される)。その項の見出しは私が便宜的に付したものである。またその末尾に「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) を<原文注記>として配し、続いてそれに対する<注記と考察>を記す。

なお小論の末尾に、Ⅲ. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑥～継続研究 (12) における～」を置く。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第三巻 (1944年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版 (1989年、初版は1973年) を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し(格変化などは、構文の類推可能性のことを考え、原文中のまま扱っている)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。イエーガーが原文注記で指示する参考文献等の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

なお、〈注記と考察〉などでギリシア古典の訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは、とくに注記しない場合は、すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ) 英文中のitなどの指示語についてはその内容を補足説明する場合がある。その場合は、〔=補足説明〕という表記で統一する。その他のカッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) ドイツ語版(原稿)からの英訳に際して、原文注記のポジション、その他、無数の変更がなされているが、本継続研究ではその中の重要なもののみを指摘しておく。いずれにしても、ドイツ語版(原稿)からの英訳は正確になされており、諸般の拡充、抽象的表現の具体的表現化、その他、などはイエーガーとの協議に基づいてなされていると判断される。本継続研究(3)Ⅲ. 1. ロ)、ハ)を参照のこと。

ホ) 〈注記と考察〉における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究(5)と同様である。

4. 本継続研究における訂正と補筆

[補筆について](その2)

イ) 本継続研究(10)の、42pの、「Ⅲ. 〈注記と考察〉(5)」の末尾に次の文章を補筆として挿入する。

なお、「教育思想史」という角度からのものとして、1984年から1986年にかけて、上智大学中世思想研究所編集『教育思想史』全6巻(『ギリシア・ローマの教育思想』『古代キリスト教の教育思想』『中世の教育思想(上)』『中世の教育思想(下)』『ルネサンスの教育思想(上)』『ルネサンスの教育思想(下)』)が東洋館出版社から刊行されている。

Ⅱ. 2 イソクラテースの弁論術とその教養理念(その2)

英訳版Ⅲ巻、第4編:46p~70p

6. イソクラテースのソークラテース学徒たち(プラトーン)に対する批判——ギリシア的パイデアーの新展開の局面にあって

<訳文>56p~59p

彼〔=イソクラテース〕は、パイデアーの代弁者たちは評判が悪いと語ってから始め、そうして彼は、その原因を、彼らの自己宣伝(self-advertisement, Ankündigungen 告知)が一般大衆の間に掻き立てている、その過度な期待に帰する。^{«33»}それに関して彼は、彼の時代には通例であった、教育の力の過大な評価に反対する態度をとる。そうして事実、

ソクラテースの声高に表明された、教育 (education, Erziehung) のようなものがほんとうに存在するのか否かという疑念、から、⁽¹⁾プラトーンの初期の対話篇の熱烈な教育の確信までの、その (意見の: der Stimmung) 激変には、何か非常に奇妙なことがあったのに違いない。ここでもまた、イソクラテースは中庸の徳を示す。彼自身は、もちろん、教師であることを望んでもいる；しかし彼は、公言する哲学者たち (philosophers, „Philosophen“) のとてつもない約束を信じるよりは、むしろ教育についてはまったく何もほしくないほうを望む、そういう素人 (the laymen, die Laien) を ‘非常に好意をもって理解する’。^{<34>}彼ら自身が多くの偽りの期待を呼び起こしているときに、彼らが真理を切望しているということをいくらかでも信用することが、どうして可能か、と彼は問う。イソクラテースは名を挙げることはしないが、しかし彼の論争のすべてのことは、まっすぐにソクラテース学徒たちに向けられているのであって、その彼らを彼は、此处や他の場所で、軽蔑的に ‘disputers 争論家たち’ (Streitredner) と呼んでいる。^{<35>}『プロタゴラス』と『ゴルギアース』においてプラトーンは、弁証法 (dialectic, die Dialektik) を、弁論家 (rhetoricians) たちの長たらしい演説にはるかに勝る技術として描き出していた。彼の敵対者 [= イソクラテース] は、弁証法を手早く片づける：彼 [= 彼の敵対者 (= イソクラテース)] はそれを論争術 (eristic, der Eristik) ——すなわち、議論のための議論——と結びつけて考える (zusammenwirft 一緒にくたにする)。真の哲学 (true philosophy, die echte Philosophie) はいつとも自身を論争術からは免れている (unterscheiden 区別する) ようにと努めるのであるが^{<36>}、それでもプラトーンが描くソクラテースの方法は (時折: zuweilen) いろいろなところがそれ [= 論争術] と共通しているように見えるのである；そして実際に、『プロタゴラス』や『ゴルギアース』のような初期の対話篇には、そうしたものがかなりある。^{<37>}それゆえイソクラテースが弁証法を、それをあらゆる精神的な病の完全な万能薬と考えるような、ソクラテース学徒たちとまったく同じように好意的に解しなかったのは少しも不思議ではない。彼らがその教授の結果として約束する、まったく誤謬を犯すことのない価値の知識というもの (knowledge of values, Werterkenntnis) (φρόνησις: 知・知恵) は、健康な常識のある人には、人間には偉大過ぎて獲得できないものと見えるに違いない。^{<38>}ホメロスは、彼は人間を神から分ける境界を実によく知っていたが、神のみがそのような誤ることのない洞察をもっていると主張するのであり、それはもっともなことなのである。⁽²⁾いかなる死すべき人間がおこがましくも弟子たちに、彼らが為すべき、あるいは為さざるべき、すべてについての誤りのない知識 (ἐπιστήμη: 知・知識) (knowledge, Wissen) を与えると、そうして彼らをその知識によって至福 (εὐδαιμονία) に導くと、約束できるというのか？^{<39>}

この批判においてイソクラテースは、わずかのスペースの中に、プラトーン哲学を並みの判断力にむかつくものとさせるような、あらゆる特徴 (the features, Züge) を集めた：つまり、質疑応答による奇妙な論争方法、それ [= プラトーン哲学] が特別な理性の器官としてのプロネーシス (φρόνησις: 知・知恵) (ないし真の価値についての知識: knowledge of true values, Werterkenntnis) に帰すほとんど神話的な価値、知識 (knowledge, Wissen) をすべてのものの救済法と考える明らかに誇張された主知主義 (intellectualism, Intellektualismus)、そして ‘blessedness 幸福’ (der Eudämonie) が哲学者に予告 (foretold, der Verheißung 約束) されるということの半宗教的な熱狂、である。明らかにイソクラテ

スは、彼の極めて鋭い矛先を新しい哲学法の術語の特異さに向けていた：(つまり) 彼はそれら [= 新しい哲学法の術語の特異さ] を、普通に教育を受けた者にとって異様で笑うべきと思われるすべてのことに関して、名文家の鋭敏な本能で探し出す；そうして彼は、「普遍的な徳」(the Universal Virtue, die Gesamttugend：純粹な徳) (πάσα ἀρετή)、それは‘善それ自体’(‘good in itself’, „Guten an sich“) というソクラテース流の知識(knowledge, Erkenntnis)の目的と見られるものであるが、^{<40>}それと、哲学者たちがその学識(wisdom, Weisheit)を売って得ようとするわずかな報酬とを比較することによって、一般の人(man in the street, dem gemeinen Verstand並みの理解力)に、若い学生が哲学者から学ぶものが、彼 [= 若い学生] がそれに支払う(わずかな：wenige)ものよりも本当にはるかに価値があるのかどうか(まったく：vollends)疑わしい、と思わせる。

彼は、哲学者たち自身は、自ら自分たちの弟子の魂に解き放ちたいと称している完全な徳(the perfect virtue, diese vollkommene Tugend)をほとんど信じることはできないのであり、なぜなら、彼らの学校(school, Schule)の規則が、その構成員に対する広範な不信用をうっかり表しているからである、ということをつけ加える。彼ら [= 哲学者たち] は、弟子が入学を許されるまえに、事前に授業料(the fees, das Kolleggeld 聴講料)がアテーナイの銀行に払い込まれるべき、ということを要求している。^{<41>}たしかに、彼らが自らの利害関係(interests, Sicherheit 安全性)に心配りするのはもっともなことである；しかし、彼らの態度(attitude, Gesinnung 心的態度)は、彼らの、正義(justice, Gerechtigkeit)と自制(self-mastery, Selbstbeherrschung)を獲得するように人を訓練するという主張とどのよううまく折り合いをつけることができるのか？⁽³⁾この論議は、われわれには、設定があまりにも低すぎるように見える；しかしそれは、まったく才知(wit, des Witzes)がないわけではない。『ゴルギアース』においてプラトーンは、弟子たちが犯す雄弁術(the art of oratory, der Redekunst)の悪用のことをこぼす雄弁家たち(rhetors, die Rhetoren)に、まったく同じような悪意をもって反証をあげていたが、彼ら [= 雄弁家たち] は自分で自分を告発していることが分からなかったのである——というのは、もし、雄弁術(rhetoric, die Rhetorik)がその学生たちを改善するということが本当ならば、実際にそれを学んだ者が、それ [= 雄弁術] を彼ら [= 弟子たち] がしたように悪用することは不可能であろう。^{<42>}実は、雄弁術の、道徳との無関係の性質が、それ [= 雄弁術] に対する主要な非難点であった。いろいろ異なる文脈において、イソクラテースは、プラトーンの対話篇のなかのゴルギアースによって述べられた見解を支持する：つまり、教師は自分の弟子に雄弁術の技術を彼がそれを正しく使えるように授け、しかも彼 [= 自分の弟子] がそれを悪用したとしても非難されない、という見解。^{<43>}すなわち、彼 [= イソクラテース] はプラトーンの批判を受け入れてはおらず、ゴルギアースがまったく正しいと主張する。しかし彼は、そのことを超えて進み、哲学者たちを、自分たち自身の弟子を疑っている(distrusting, Mißtrauen)という理由で攻撃する。このことは、彼が発足の(inaugural)辞として演説『ソフィストたちを駁す』を執筆していたとき(in seiner Programmschrift 彼の趣意書において)、彼はプラトーンの『ゴルギアース』を知っていて、熟慮してそれに応じることを企てた、ということ推定させる。^{<44>}

プラトーンの対話篇は、とくにゴルギアースの弟子としての彼 [= イソクラテース] には不快に思われたに違いないし、また彼は、彼の師の名を借りて自分が攻撃されていると

感じたに違いない：というのは、われわれが示してきたように、プラトーンが攻撃したのは、ゴルギアースその人だけではなく、あらゆる種類の弁論術でもあった。イソクラテースが彼の発足の演説 (his inaugural speech, der Eröffnungsrede) 『ソフィストたちを駁す』であざ笑っている、‘論争家たち (eristics)’ („Eristiker“) のあらゆる典型的な学説は、(はたして：denn auch) すでに明白に『ゴルギアース』で明確に述べられていたのであるが、そこ [= 『ゴルギアース』] ではそれら [= ‘論争術’ のあらゆる代表的な学説] は、プラトーンの新しいパイデアー学説にとっての意味との特別な関連で、分析された。<45> (『パイデア』 II, 126f.)⁽⁴⁾ プラトーンとソクラテース学徒たちは、イソクラテースが攻撃した敵対者のその筆頭にあるが、彼 [= イソクラテース] が彼らを特別に激しく徹底的に攻撃するので、彼が、彼らの学説 (teaching) が自分の理想 (ideal, Ideal) を脅かすことになる危険、を十分に理解していることは明らかである。彼の毒舌はまったく現実主義的である (realistic, praktischer Art)。彼はそれを、決して敵対者の見解に対する理論的な論駁にはしないのであって、というのは、もしそうすれば自分が敗訴するであろうということを知っているのである。彼が選ぶ領域は (むしろ一貫して：vielmehr durchgehends) 普通の常識 (ordinary common sense, den Standpunkt des Durchschnittsmenschen 普通人の立場) のそれである。彼は一般の人 (the man in the street)⁽⁵⁾ の本能に訴える——そういう人 (der Laie：素人・俗人) は、哲学者たちの専門的な秘儀 (secrets, Geheimnisse) を理解することはなく、弟子たちを知恵 (wisdom, Weisheit) と幸福 (happiness, Glückseligkeit 至福) に導くという人たちは自身は何も所有していず、彼らの門下生たちからは何も受け取っていない、ということを知っている。⁽⁶⁾ <46> 彼らの [= 弟子たちを知恵と幸福に導くという人たちの] 貧しさは、eudaimonia (エウダイモニア) つまり、至福、についての伝統的なギリシア人の発想とは一致しなかったのであり、他のソフィストたち——たとえばアンティフォーン——はずで、ソクラテースがそれ [= 彼らの貧しさ] を称揚するのをあざ笑っていたのである。⁽⁷⁾ <46a> 一般の人 (the man in the street, der Laie) は、人びとの発言にある矛盾を暴くような人間は自分たち自身の行為にある矛盾に気づかない、ということが分かるのである；そうして (一般の人は)、彼らはあらゆる未来の問題について正しい決断の仕方を弟子たちに教えると自称するかもしれないが、彼らは現在については何にも言えないか適切な助言をできない、ということが分かるのである。<47> そうして彼 [= イソクラテース] がさらに、大衆 (the mob, die Vielen) ——その行為は憶断 (Opinion, Meinung 意見) (δόξα) にすぎないものに基づいているのであるが——は、知識 (Knowledge, des Wissens) (ἐπιστήμη) をいっぱいもっているとうそぶく人間よりも、お互いに同意すること、行いの正しい方向をびたりと当てること、が容易いと考えているのだ、と言うとき、彼 [= イソクラテース] は結局、哲学を研究すること (the study of philosophy, diese Studien) を軽蔑せざるを得ないのである——それ [= 哲学を研究すること] は空虚なおしゃべり、単なる細かいことへのこだわり (hair-splitting, Mikrologie) であり、間違いなく ‘魂の配慮 (the care of the soul, Seelsorge)’ (ψυχῆς ἐπιμέλεια) などではない、と推断して。<48>

とりわけこの最後の論旨は、イソクラテースが自分の攻撃をプラトーンとその他のソクラテース学徒たち——(おそらく：wohl) とりわけアンティステネース⁽⁸⁾——に向けているということを確認なものとする。彼は意図的に——しかも、ある意味では当然なこと

として——彼らの相貌を、彼ら皆がそうであると名乗っていた‘ソクラテースの弟子’、という一つの合成の肖像へと混ぜ合わせた。<48a>それにもかかわらず彼は、ソクラテースの弟子たちはお互いに激しく敵対しているということを非常によく知っており、そうして彼は彼らの格闘を、専門的な哲学者たち (professional philosophers) に対するまた別の論証 (argument, Argument) ——いつの時代にも常識 (common sense, der *common sense*) のお気に入りの論証——へと変換する。自分の師の貧困 (poverty, die Armut) と自活 (independence, Bedürfnislosigkeit 無欲さ) を真似たのは、とくにアンティステネースであった；しかるに、イソクラテースが描く肖像の抽象的、理論的な (abstract and theoretical, mehr theoretisch-philosophischen より理論的、哲学的) 相貌は、主としてプラトーンから引き出され、細かいことへのこだわりとしての哲学 (philosophy) の叙述は、明らかに、プラトーンの、問答法 (dialectic, der Dialektik 討論術)⁹⁾の論理法 (the art of logic, logischen Kunst) への綿密な仕上げ (elaboration, Ausbildung) に向けられている。<48b>それは、イソクラテースが正しく見抜いたように、理論 (theory, Theoretische) と純粋な形式 (pure form, Formale 形式) の領域に通じる歩みであった。だから彼は、矛盾を暴露するこの新しい技術——知識 (Knowledge, die Episteme) によって憶断 (Opinion, der Doxa) を克服しようと企てる技術<49>——を古いソクラテースの‘魂の世話’<50>という目的で判断し、それ [= 矛盾を暴露するこの新しい技術] のこの目的を達成しようとする能力 (ability, Wert 価値) に疑問をなげかける。そのために彼は、自分の批判 (criticism, Kritik) を、(歴史が示すように) 本当の問題が横たわる、まさにその地点で終わりにしている。だから、われわれがここで目撃するプラトーンとイソクラテースとの間の議論 (the argument, dem Dialog 対話) には、教養理念 (the ideal of culture, des Bildungsideals) が発展させられてきた長い一連の論争 (conflicts) の中の、開かれた部分がある——つまり、争論 (dispute, des Streites 確執) のつまらない個人的な細事に左右されることなく未だ深い永続的な価値を保持している、弁証法の過程 (a dialectic process, eine geschichtliche Dialektik 歴史的な弁証法) のことである。

<注記と考察>

(1) プラトーン『メノン』の冒頭で、メノンはソクラテースに、「こういう問題に、あなたは答えられますか、ソクラテース。——人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んでも得られるものではなくて、人間に徳がそなわるのは、生まれつきの素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか……。」(藤沢令夫訳、岩波文庫) という問いを提示する。その対話篇の後段で、ソクラテースはアニュトスに対し、次のように応答している。

「…だがおそらくは、わが友アニュトスよ、徳は教えられることのできないものだというのが、事実なのではないだろうか。」(94e)

イエーガーは、このようなソクラテースの言葉のことを言っているのであろうか。

(2) ホメーロスを引きながらの、ここの前後の説明は、イソクラテースが『ソフィストたちを駁す』で述べていることの確認である。

(3) ここのパートは、イソクラテースの『ソフィストたちを駁す』の内容の確認である。

- (4) 参照箇所とされている『パイデア』Ⅱ, 126f. は、「6. ゴルギアース：政治家としての教育者」の章である。
- (5) the man in the street は直訳すれば「通りにいる人」ということになるが、「一般の人」と訳しておいた。近現代につながる「素人」と「専門家」の実態と観念が古代ギリシアの医学（思想）のなかで歴史的に生まれており（本継続研究（5）Ⅱ. 4. の〈注記と考察〉（6）を参照のこと）、そしてこの箇所も、ドイツ語版では、der Laie を Geheimnis と対応させて用いられているおり、比喩的意味合いが含まれていると判断される。イエーガーはイソクラテースの立論をこの「専門家」に対する「素人」の意識に訴えようとしたものと分析している。なお the man in the street を「一般の人」と訳すに際しては、小池訳の『ソフィストたちを駁す』中の τῶν ἰδιωτῶν (the layman) が「一般の人」と訳されていることも参考にした。
- (6) ここのイエーガーの叙述は、直接的には、原文注記47. したがって、その〈注記と考察〉（70）、に該当する。
- (7) 原文注記46a. に関しては、その〈注記と考察〉（69）のとおりであるが、ソークラテースが貧しさを称揚している、という意味あいを理解するために、その〈注記と考察〉（69）では引かなかったソークラテースの発言を下に記しておく（クセノフォーン『ソークラテースの思い出』佐々木訳、岩波文庫）。
- …それからまた、友人あるいは国家の救援におもむかねばならぬ場合、いま私の暮しているように暮らしている者と、君が幸福と呼ぶように暮らしている者と、どちらがこれに応ずる余裕をよけいに持っているであろうか。高価な食糧がなくては暮せないものと、あり合わせの物で間に合う者と、どちらが戦場の艱難を楽に耐えるであろうか。容易に手に入らぬ物をほしがる者と、手あたり次第の物で充分暮して行ける者と、包囲に陥ったとき、どちらが一層早く降伏するであろうか。アンティフォーン、君は幸福とは贅沢と豪華のことだと思っているようだ。私は思う、欲するものなきは神にひとしい、けれどもほしい物が最小限に少ないのは神に近い。そして神にひとしいのは最大の善であるが、神に近いのは最大の善にもっとも近いものだろうと。
- (8) アンティステネース：前455/444年頃～前365/360年頃。アテーナイ生まれの哲学者で、「初めゴルギアースに学び、教師をしていたが、のちソークラテースの熱心な弟子になる。ソークラテースにめぐり会うや教室を閉じ、「諸君、それぞれの師を捜すがよい。私は今その人を見つけたのだ」と門弟たちに告げたという。ソークラテースの禁欲的で質実剛健な実践面を継承し、師の刑死（前399）後、アテーナイ郊外のキュノサルゲスのギュムナシオン（体育場）で教えた。「幸福は徳に、徳は知識に基づくが故に、徳は教え得る」と説き、富や名誉や快樂を蔑視、無欲にして自ら足れることを志した。「所有されないうために、私は所有しない」を標榜し、「快樂よりはむしろ狂気を望む」「思慮は最も堅固な防壁」「徳は奪い去られることのない武器である」と言って、議論よりも実践を重んじ、財産を所有せず質素な衣服をまとい杖と頭陀袋を携えて歩いた。」という。また、「アニュートスらソークラテースを告発した者たちを、ソークラテースの令名を慕って海外からやって来た青年たちをけしかけることによって、国外追放ないし死刑に追いやったのも彼であるという。」ということである。（松原著）イソクラテース

もゴルギアースに学んでいるから、弟子同士が対決する関係に入ったことになる。(同時に、アンティステネースは「相弟子のプラトーンと激しく対立」していたという。)

なお、アンティステネースについては、本継続研究(7) II. A.1.の<注記と考察>(3)で上述のような説明を付している。

(9) ディアレクティケーのことであり、「弁証法」とも訳される。

7. イソクラテースのソフィストたちに対する批判、および自己の立場

<訳文> 59p~60p

イソクラテースによって攻撃された第二の敵対者 (opponents, Gegnern) の集団は、彼によって政治の (of politics, der Politik) 教師と呼ばれている。<51>彼らは、哲学者たちのようには、真理を探し求めることはしない。彼らは単に自分たちのテクネー (technē, „Techné“) を実行する——それは [=テクネーは] 言葉の古い意味での自分たちの技能 (craft) であり、<52>したがって、それは倫理的責任の何の痕跡も含んではいない。『ゴルギアース』においてプラトーンは、真の雄弁術 (rhetoric, Rhetorik) は、医者者の技能のように、そのような倫理的責任を必然的に伴うべきであると主張していた。<53>イソクラテースはプラトーンの要求を否定できなかった；そうして彼の相手 (his opponents, Konkurrenten ライバル) の第三のグループ、法廷の雄弁術 (forensic oratory, der gerichtlichen Beredsamkeit) の教師たち、の彼の扱いにおいては、倫理的要素は特別に顕著である。⁽¹⁾しかし彼は、単純にプラトーンを賞揚するためにその妥当性を主張するようなことはしなかった。彼の、政治演説 (political speeches, der politischen Reden) をする技能を教える者についての批評は、われわれを、哲学とはまったく正反対のタイプの教育——即席に演説する技術——に引き合わせる。この問題における典型的な専門家として、われわれは、イソクラテース自身の、ゴルギアースの学校における学友、アルキダーモス⁽²⁾——彼 [=イソクラテース] のようにいくつかの模範演説を出版しているが、しかしその長所は即興 (αὐτοσχεδίαζεν⁽³⁾) であった——のことを考えなければならない。<54>彼の保存されている演説のうちの一つは、はっきりとイソクラテースのような (like, vom Schlage タイプの) 雄弁家 (rhetors, die Rhetoren) ——十分にうまく書くことができるが、目下の状況に必要とされていることを言う決定的瞬間を掴むことができない、そういう雄弁家——に向けられている。<55>この技術の絶えざる練習は、たとえ実際の授業がややもすれば単なる型にはまった教授に墮し、技術へのより高い要求を粗野に無視したとしても、活動的な雄弁家 (an active public speaker, praktischen Redner 実践的な雄弁家) を目指す学生にとって非常に貴重な訓練であったことに疑いがあるはずはない。この種類の敵対者をイソクラテースは、センスを欠いている (lack of taste, der Anästhesie 無感覚) と非難する：彼らは、彼 [=イソクラテース] は断言する、美的センス (aesthetic sense, künstlerischem Qualitätsgefühl) を欠いている。<56>実際問題として、彼らの雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) の類型 (type, Form 形態) は結局、弟子が暗記していつでも利用できる、形式的な修辭的技巧の収集物にすぎない。それは、彼 [=弟子] の知性も経験も拡大もせず、単に彼に、小学校教師が年少の子どもたちにアルファベットを教えるように、演説する型 (the patterns, die Formen) を抽象的な形式としてそらで覚えるように教えるだけである。<57>この方法は、その当時の、教育も生活そのもの (life itself, das

ganze Leben) も可能な限り技巧化する (mechanizing, technisieren) 傾向のよい例である。イソクラテースは、自分自身の芸術的手腕 (artistry, Künstlertum 芸術家性) を空疎な営利目的化された技巧 (this empty commercialized technique, diesem Banausen seines Faches その道の俗物) と区別し、ともすれば哲学的教育 (philosophical education, der philosophischen Bildung) の精緻さに対する自分の嫌悪によって自身が招来したのかかもしれない己の嫌疑——偏狭に実践的であるという嫌疑——を晴らすために、機会 (the opportunity, die erwünschte Gelegenheit 好都合の機会) を捉える。⁽⁴⁾ 彼が探しているのは、誇大な理論と低俗なわずかな金を追う技巧的器用さとの間の中間の道である；そうして彼はそれを芸術的に鍛錬された形式 (artistically disciplined Form, die künstlerische Gestaltung der Form 形式の芸術的構成) に見い出す。◀58▶ここに、彼は第三の原理を導入する。ここでも再びわれわれは、彼が他の見地との比較で自身と自分の理想 (ideal, Ideal) を説明しているのに気づく。しかしこのように二つの戦線で闘うことによって、彼は、自分の哲学的教育 (philosophical education, die philosophische Bildung) との抗争、それは (彼にとって : ihm) 重要なものであるが、は自分自身の理想 (ideal, Wollen 意図) の半分しか表現していない、ということをはっきりさせる。(それに : auch) 彼は実際に、一般に受け入れられている意味での雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) からは別の方向へはるかに隔たっているのである。というのは、哲学の領域だけではなく、雄弁術の領域でも、イソクラテースのパイデア (paideia, Paideia) はまったく新しいものであった。

<注記と考察>

- (1) 「倫理的要素は特別に顕著である」とは、イソクラテースが倫理的要素の面から法廷雄弁術教師をつよく批判している、という意味。
- (2) アルキダーモス (3世) : スパルターのエウリュポーンティダイ家出身の王の継承者の一人で、在位は前360年頃～前338年8月。イソクラテースとの関連については、「彼 [=アルキダーモス] に好意を抱いていたアテナイの弁論家イソクラテースはその名を冠した仮想演説『アルキダーモス』を記し、また未完の『第9書簡 (アルキダーモス3世宛て)』では、ギリシアに平和を築いて異民族 barbaroi に対抗するように彼に奨めている。」ということである。(松原著)
- (3) αὐτο-σχεδιάζω : 即興で語る
- (4) イェーガーは、イソクラテースが演説文中で混ぜて批判している敵対者を区分けして浮き上がらせ、その事実のなかに、イソクラテースの心理をも読み解こうとしている。イェーガーの古代学の熟度を示す、彼の「私は、四世紀における教養 (culture) の優位性を求めての哲学的勢力と反哲学的勢力との対抗を、我々の全体を理解することを損なったり、今日に至るまでヒューマンイズム (humanism) の歴史において根本的なものである、この対立の状況を覆い隠したりしなければ、解体されることはない、たった一つの歴史劇であると理解しようと試みてきた。」(本継続研究 (3) II. 4. 119p) という言明を参照のこと。

8. プラトーンがアイデアの「知識 (Knowledge)」を問い続けるのに対し、イソクラテースは「思いなし (Opinion)」や美的能力を重視する

<訳文> 61p~65p

他のどんな生活領域よりも、雄弁の技術 (the art of oratory) は、あらゆる個々の要素をいくつかの確立されたひな型 (*schemata*, Schemata)⁽¹⁾、つまり原形 (basic forms, Grundformen 原型)、に還元するために、系統だった思考力 (systematic reason) の努力に耐える。論理学 (logic, der logischen Aussage 論理的言明) の領域においてプラトーンはこれらの原形をアイデア (the Ideas, die Ideen) と命名する。われわれが見てきたように、彼はそれらの記述のこの三次元的な方法 (three-dimensional mode, plastische Anschauungsweise 立体的なものの見方) を当時の医学から借用し、それを本質 (Being, des Seins 存在) の分析に転用した。それと同時に、雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) においてわれわれは操作の同一の過程 (process, Entwicklung 動向) を、それがプラトーンの術語アイデア (*idea*, „Ideen“) の使用に直接的に影響を受けていたとは断言できないけれども、見ることができる。医術と雄弁術は、本質的に、この原形 (basic forms, Grundgestalten 原型) ないしアイデアという概念が発展させられ得た分野 (the spheres, Erfahrungsbereiche 経験分野) であった——というのは、医術はいくつもの外見上異なった生理学的諸事実⁽²⁾をいくつかの基本的な類型に還元するのである；そうして雄弁術は同様に、個々の異なる政治的ないし法的状況に見えるものを簡単にするのである。二つの技術の本質は、個々の事例を、それを実際において扱いやすくする (make it easier to treat, vereinfachen 単純化する) ように、その普遍的な相 (general aspects, allgemeine Grundformen 普遍的な原型) へと分解すること (to analyse, zurückzuführen 還元すること) である。これらの普遍的な原型 (general patterns, Ideen アイデア) をアルファベット (στοιχεῖα⁽³⁾) の文字 (the letters of the alphabet, der Erfindung der Buchstaben des Alphabets アルファベットという文字の考案) にたとえること——それをわれわれはここでイソクラテースに、そうしてあとでプラトーンに (にも : auch) 見い出す——は、十分に理解しやすいことであった。(というのは : denn) 読むという行為は、政治的ないし法廷のないし医学的な診断 (diagnosis) のそれとまったく同じである⁽⁴⁾ : つまり、さまざまに集められたたくさんの形 (shapes, Gebilde 形成物・形象) は、ある限定された数の基本的な (basic, zugrunde liegender) ‘諸要素 (elements, Elemente)’ に還元され、そうしてこのようにして、外見上は多種多様な形 (shapes) のそれぞれの意味が見分けられる。<59>科学においてもまた、物質的自然 (physical nature, Naturwissenschaft 自然科学) を構成する ‘諸要素 (elements, die Elemente)’ は、同じ時代にあの名前 [= ストイケイア : 基本的構成要素・字母] によって初めて呼ばれ、そうしてその基礎に (も : auch)、言語とアルファベットの文字から引き出される同じ類比が横たわっているのである。<60>イソクラテースはもちろん、いかなる意味においても、雄弁術の (rhetorical, rhetorischen) アイデア学説という理論をはねつけることはしない。実際は、彼の著作は、彼があ理論を大いに我がものとして採り入れたということ、また彼が自分自身の学説 (teaching, Lehre) の基礎として弁舌 (oratory, der Rede) の基本型 (the basic forms, Grundformen) の支配力 (the mastery, den Bahnen der Beherrschung) を採用したということ、を明らかにする。しかし、これらの型 (forms) だけを知る雄弁 (oratory, Beredsamkeit 雄弁) は、

音を出す真鍮やチンチンとなるシンバル (sounding brass and a tinkling cymbal, eine hölzerne Klapper 木製のがらがら) であるだろう。不動で不変であるアルファベットの文字は、人間の生活の流動性と多様性とは正に完全に対照的なものであり、その [= 人間の生活の] あふれるほどの豊かな複雑性は厳格な規則のないところでもたらされるのである。<61>完べきな雄弁は、唯一の決定的瞬間、a *kairos*、⁽⁵⁾の個別的な (individual, individuelle) 表現でなければならないのであり、そうしてその [= 完べきな雄弁の] 最高の原則 (law, Gesetz) は、それが完全に適切である (appropriate, Angemessenen) べきというものである。これらの二つの規則 (rules, Gebote) を注視することによってのみ、それは新しく独創的であるということに成功し得る。<62>

一言でいうと、雄弁術 (oratory, die Redekunst) は想像的、文学的な創造である。それはあえて技巧 (technical skill, der Technik) なしで済ますようなことはできないけれども、それはそのこと [= 想像的、文学的な創造] の手前で踏みとどまってはいけない。<63>ちょうどソフィストたちが自分たちを詩人の、その [= 詩人の] 独特の技術を彼らは散文に移したのであるが、その真の継承者であると思っていたように、イソクラテースも、自分が詩人たちの仕事を継続し、彼の少し前までは彼ら [= 詩人たち] が自国民の生活を満たしていた、その役割を引き継いでいると意識している。彼の、雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) と詩歌 (poetry, der Poesie) との対照は、卓越した警句 (a passing epigram) をはるかに超えたものである。彼の演説をとおして、この見解の影響を確かめることができる。偉大な人間への賞賛の演説 (panegyric, das Enkomion) は賛歌から翻案され、しかるに勧告の演説 (hortative speech, die Mahnrede) は勧告的な (protreptic, paränetischen) 哀歌や教訓的な叙事詩のひな型に従う。そうしてこれらの範型において、イソクラテースは自分の思想の理法 (the order of his ideas, Gedankengehalt 思想内容) でさえ、相応する詩的類型のそれぞれの決まりである、ゆるぎない伝統的な理法 (order, Überlieferung 伝えられたもの) から写し取る。それどころではない：雄弁家 (orator, des Rhetors) の地位と名声は、この詩人 (poet, dem Dichter) との相似によって決まる。この新しい職務は、古くからの堅固に確立されたものに基かなければならぬし、その基準をそこからとらなければならぬ。イソクラテースが実際の政治家として成功することを期待し望むことが少なくなればなるほど、彼は一層詩歌 (poetry, der Dichtung) の権威に自分の精神的な志 (aims, Sendung 使命) を引き立たせてもらう必要がある；彼の雄弁術 (rhetoric, Rhetorik) に魂を吹き込んでいる、その教育的な精神 (the educational spirit, der erzieherische Geist) においてさえ、彼は、ギリシア人が古の詩人たち (poets, Dichter) の教育的役目 (the educational function, dem Erzieherium 教師性) だと思ったもの、と慎重に張り合っている。のちに、確かに、彼は自分の作品を (ピンダロス⁽⁶⁾がかつてが為したように) 彫刻家のそれと比較し、誇らしく自分をペイディアースと同格に置く；<64>しかしそのことはむしろ、彼の技術の高さにもかかわらず、雄弁家の仕事のある二級のものと考える者がまだ居るという事実を説明するためである。(なにしろ：doch) 古典期のギリシア人はいつも、彫刻家業 (the sculptor's trade, der Bildhauer 彫刻家) を、普通の職人の類似した仕事として、少し見くびる傾向があったのである、しかも、*sculptor* ということばは、単純な石工からパルテノンの (天才的な：genialen) 創作者まで、石を細工するあらゆる職人に用いられ得たのではあるけれども。⁽⁷⁾しかし後になって、造

形芸術 (the plastic arts, der bildenden Kunst) とその巨匠の名声が古典期以降の世紀に徐々に高まるにしたがい、雄弁術 (oratory, der Redekunst) を彫刻術 (sculpture, Skulptur) や画業 (painting, Malerei) にたとえることはより一般的になるように見える。しかしながら、雄弁術 (rhetoric, Rhetorik) の詩歌 (poetry, Poesie) の、王位としての継承は、雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) が新しい教養の力 (cultural force, Bildungsmacht 人間形成力) として生じた精神過程 (the spiritual process, den geistesgeschichtlichen Vorgang 精神史の経過) という点で、本来の姿 (the true image, das eigentliche Sinnbild 本来の象徴) のままであった：後のギリシア詩歌 (poetry, Dichtung 文学作品) の全てが、単純に雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) の所産である。<65>

当然にも、イソクラテースの、雄弁術の教育的価値 (the educational value, des erzieherischen Wertes) の見解は、その [= 雄弁術の教育的価値の] 本来の性質 (its true character, ihres Wesens その本質) のこの見方によって (同様に: ebenfalls) 明らかにされる。雄弁術 (oratory) は、創造行為だから、その最高の広がりにおいては、学校の教科のように教えることはとてもできない。⁽⁶⁾ しかもなお、彼は、それを若者を教育することに使うことができると考える⁽⁹⁾：彼の、ソフィストたちの教育理論 (the pedagogic theories, der Pädagogik 教育学) によればすべての教育の基礎となる、三つの要素間の関係についての、類のない固有の見解ゆえに。それらは [= 三つの要素は] とは：(1) 素質 (talent, Natur)、(2) 学習 (study, Lernen)、(3) 練習 (practice, Übung)。当代の教育 (education, Erziehung) と教養 (culture, Bildung) への (世間一般の: allgemeine) 熱意は、それらの諸力の誇張された見方を産み出し広めるのを手伝った；<66>しかしその熱意のあとに、ある幻滅がきた——一部分はソークラテースのような、教育の限界や自負についての重要な (far-reaching, grundsätzliche 原理的な) 批判の結果であり、<67>もう一部分は、ソフィストたちが教育した多数の青年がそのような利点にまったく恵まれなかった者と比べていささかも良くはなかったということの発見、の結果である。<68>イソクラテースは、教育の正確な有用性 (value, den Nutzen) を非常に慎重に説明する。彼は、生まれつきの素質は第一の要素だと断言し、教育を受けていない偉大な才能は (great gifts, untrained, große Begabung ohne Bildung)、しばしば能力なしの単なる教育 (mere training without ability, bloße Bildung ohne Begabung 才能のない単なる教育) 以上のものを達成するというのを承認する——もっとはっきり言ってしまえば、そこに教育 (train, bilden) に値するものがないのに教育 (training, Bildung) について話すことができるとすればだが。第二に重要な要素は、経験 (experience, die Erfahrung) であり練習 (practice, Übung) である。<69>たしかに、それまでは職業的な雄弁家たちは、理論的には三位一体——素質 (talent, Naturanlage)、学習 (study, Lernen)、練習 (practice, Übung) ——を認めていたかのように思えるが、しかし、自分たち自身の教育過程では、学習 (study, das Lernen) や教育 (training, die Bildung) を前面に押し出していたのである。イソクラテースは、控えめに、教育 (training, die Pideusis) (paideusis)⁽¹⁰⁾ を第三位に下げる。それ [= 教育] は、と彼は言うのであるが、もしそれが素質 (talent, Genie) と経験 (experience, Erfahrung) に助けられれば、多くのことを成し遂げられ得る。それは、雄弁家 (speakers) を自分たちの技術についてよりはっきりと意識的にし、また彼らの創造的能力を刺激し、彼らを多くの曖昧さとうまくいかない手探りから免れさせる。教育に

よって、素質の劣った生徒でさえ、彼は決して傑出した雄弁家 (orator, Redner) や著述家 (writer, Schriftsteller) には造られ得ないとしても、向上させられ得、知的に伸せられ得る。⁽¹¹⁾ <70>

雄弁術の教育 (training, Bildung) は、とイソクラテースは言う、‘(理想的な) 原型 (ideas, die Ideen)’ ⁽¹²⁾ への洞察、ないし、どんな演説 (speech, Rede) もそれによって造られる基本型 (basic patterns, Grundformen) というものを、教えることができる。彼は、それ [= 雄弁術の教育 (der Ausbildung 養成専門教育)] のこの側面、それまで教育されていた (cultivated, kultivierte) ものの唯一のもの、は、ずっと意味深い展開が可能なのだ、ということを示しているように見える；そしてわれわれは、彼の新しい (理想的な) 原型の学説 (doctrine of ideas, Ideenlehre) を、それ [= 彼の新しい (理想的な) 原型の学説] を古い雄弁家のそれ [= 学説] と比較することができるようになるために、喜んでもっと聞きたいと思う。しかし問題の本当の難しさはそれ [= 雄弁術の教育] のあの相 [= (理想的な) 原型] にあるのではない——それは十分に教えられるのだからますますそういうことになる。それ [= 本当の難しさ] は、それぞれの主題についての、‘(理想的な) 原型 (ideas, Ideen)’ の、適切な選択、混合 (commixture, Mischung)、配置に、また適切な瞬間の選択に、また演説を省略推理法 (enthymemes, Enthymemen) によって装飾する審美眼と適切さに、そしてまた言葉の律動的な音楽的な配列に、ある。<71> それらすべてを適切に行うには、力強く鋭敏な精神が要る。これは、つまり養成専門教育 (Ausbildung, training 教育) の最高段階は、弟子たちにおいては、演説の ‘(理想的な) 原型 (ideas, der Ideen)’ の十分な知識とそれらの使用 (employment, Anwendung 応用) における技能 (skill, Geübtheit 熟達) を当然のこととする；それ [= 専門養成教育の最高段階] は、教師には、合理的に教えられ得ることすべてを詳しく説明する能力を求め、そしてそれは、それを超えることは——つまり教えられ得ないことすべてのことでは——、彼 [= 教師] が自分で弟子たちのために模範を示すように要求する：彼を真似ることによって自己形成することができる者たちが、すぐに誰よりもより華麗で優雅な話し方を達成できるように。<72>

プラトーンは、後に『国家』において、最高の教養 (the highest culture, des höchsten Ziels der Bildung 教養の最高目標) は、(実際は：in Wirklichkeit) めったに調和している (together, vereint 一体化している) のを見つけないような一定の諸資質 (qualities, Eigenschaften 諸性質) が一致する (coincide, „Zusammenfallen “一致すること) ときのみ獲得され得る、と言明した。同様にイソクラテースは、われわれが述べてきた全要素が同時に活動させられること (are brought into play at once, in der Koinzidenz 一致に) がなければ教師が成功することは不可能である、と断言する。⁽¹³⁾ <73> ここで、プラトーンから独立して、教育 (education, der Erziehung) とは完全な人間が形成される過程であるという (the process by which the whole man is shaped, als einer Formung des Menschen 人間形成として) 一般的なギリシア人の考えが、言明され、‘模範 (model, Modell)’ とか ‘範例 (pattern, Vorbild)’ (παράδειγμα)、‘刻印する (stamp, ausprägen：鑄造する)’ (ἐκτυποῦν)、‘模倣する imitate, nachahmen’ (μιμῆσθαι)、といった言いまわしで、さまざまに説明される。<74> 本当の問題は、この ‘形成 shaping’ (Formung) 過程がどのように美しい像 (image, Bilde) から実際の現実 (a practical reality, praktischen

Wirklichkeit) へと変換されるかということであり——つまり、何が人格形成 (forming the human character, des Formens) の方法であり、(したがって: mithin) 究極のところ、何が人間の知性 (the human intellect, des menschlichen Geistes) の the nature (der Nature 本質) と考えるか、ということである。プラトーンは魂を、善 (the Good, Guten)、正義 (the Just, Gerechten)、美 (the Beautiful, Schönen) などなどの完全な規範 (absolute norms, absoluter Normen) としてのイデアーの知識によって⁽¹⁴⁾ 形成しようとし、だから、ついにはそれ [=魂] を、あらゆる存在をそれ自身のうちに含む知性によってのみ認識可能な宇宙 (an intelligible cosmos, einem intelligiblen Kosmos) へと発展させようとする。そのような知の宇宙 (universe of knowledge, Universum des Wissens) は、イソクラテースには存在しない。彼にとっては雄弁術の教育 (rhetorical training, der rhetorischen Bildung) は、知識 (Knowledge) によってではなく、単に思いなし (Opinion, Meinen 思うこと) によって片づけられている。しかし彼はしばしば、知性は (intellect, im Geiste 精神)、完全な知識 (absolute knowledge, eigentliches Wissen im absoluten Sinne 完全な意味での真の知識) を具えることなく、それでもなお適切な方法と適切な目的 (the right means and the right end, der Zile- und Treffsicherheit 的確さと正確さ) を選ぶことができる、美的、実践的な能力 (an aesthetic and practical faculty, eine praktische Kraft 実践的な能力) をもっている、と主張する。<75>彼の全教養概念 (conception of culture, Bildungsgedanke) は、この美的能力 (aesthetic power, künstlerischen Fähigkeit) に基礎づけられている。プラトーンの弁証法 (a dialectic, Dialektik) は、若い学生を徐々にイデアー (the Ideas, den Ideen) に導く; しかしそのことは、それでも、それ [=イデアー] を彼の人生 (life, Leben) と行為 (conduct, Tun) に用いることは (結局: schließlich) 彼 (自身: selbst) に任せており、また彼がそれ [=イデアー] を用いる方法は合理的には説明され得ない。同様にイソクラテースは、ただ諸要素と教育的行為の個々の段階だけを描写することができる。その形成過程そのもの (the formative process itself, die Formung als solche) は、神秘 (a mystery, ein Geheimnis) のままである。本質 (nature, der Natur) がそれ [=その形成過程そのもの] から全面的に払いのけられるはずはなく、それ [=その形成過程そのもの] の支配に完全に委ねられるはずもない。それゆえ、教育 (education, der Bildung) におけるすべてのことは、本質 (nature, Natur) と技術 (art, Kunst) の適切な協同 (cooperation, Ineinandergreifen 相互の密接な連関) にかかっている。ひとたびわれわれが、イソクラテースの不完全さ (incompleteness, die Halbheit) (プラトーンが称していたように) と彼の単なる思いなしへの依存 (his reliance on mere Opinion, sein Stehenbleiben bei der bloßen Meinung 単なる思いなしのもとに停滞していること) (プラトーンがあらゆる雄弁術の生命力と称したもの) が彼の主題 (subject, den Gegenstand) によって彼に課せられたものと推断するならば、そうすればわれわれは、彼の決然とした自己限定 (self-limitation, Selbstbegrenzung) と、‘高等な (higher)’ もの (Höhere 高等なもの)、彼が曖昧で疑わしいと感じたもの、のすべてに対する熟慮した上での (deliberate, entschlossener 決然とした) 断念とは、彼によって強さに転じられた (converted by him into a strength, zur Stärke zu machen weiß 強さに変えることを心得ている)、一種の体質的な弱点 (constitutional weakness, konstitutionelle Schwäche) なのだと結論しなければならない。これ [=一種の体質的な弱点] は、修養の分野での (in the

sphere of culture, an der rhetorischen Bildung 雄弁術の教育で)⁽¹⁵⁾、イソクラテース自身の個人的な成功を保障したものと同種のものである：彼は、やむをえずやったことを自発的にやったような振りをしているのである。彼は雄弁術の経験主義的な性質を認めている；そして、それを真のテクネー (techne) ないし技術 (art) と称することが正しかろうとなかろうと——プラトーンは『ゴルギアース』で、そうでないと主張していた——、イソクラテースはその経験主義を固守する。その点で彼は、先輩たちによって樹立された *imitation* (模倣, der Nachahmung) の原理——将来は、修辞学 (rhetoric)⁽¹⁶⁾ で、そして (文学 (literature) がいよいよ修辞学 (rhetoric) の影響を受けていくように) 文学のあらゆる分野で、あれほど絶大な役割を果たす原理——に固着する。この点で、われわれは、彼の教授法 (method of teaching, Methode der Erziehung 教育法) について、彼の雄弁術的なアイデア論の受け止め方について (of his attitude to the rhetorical doctrine of ideas, hinsichtlich der theoretischen Ideenlehre 理論的なアイデア論に関して) よりも、いっそうよく知っている；というのは、彼の偉大な演説のすべては、(zugleich 同時に、) 彼の弟子たちが彼の技術 (art, Kunst) の指示 (the precepts, die Forderungen 要求) を学び得るような、模範 (models, Muster der Nachahmung 模倣の手本) となるように意図されていたのである。

<注記と考察>

- (1) schema (Schema) はギリシア語の σχῆμα (スキーマ：「姿、形」「外見」「あり方、形態」など) に由来する。
- (2) ドイツ語版で psychologischen となっているものが、英訳版では physiological とされている。ドイツ語版における誤記が英訳版で正されたのであろう。
- (3) στοιχείον には「単音、字母」「基本的構成要素、基本」という意味がある。なおドイツ語版では (στοιχεῖα, γράμματα) となっている。γράμμα には「文字」のほか、「絵、文様」「文書、碑文」「成文法」などの意味がある。また、言うまでもないことであるが、「アルファベット」は「 α , β 」に由来する。
- (4) diagnosis は、ギリシア語 διά-γνωσις (「区別すること (方法、力)」「決定、判定」) に由来する。この diagnosis (διά-γνωσις) については、本継続研究 (8) II. 13. のイエーガーの叙述 (紀要拙論206 p) を参照のこと。Reading には「読むこと」のほか、「(法律・事件・夢・天候などの) 解釈・判断」という意味がある。
- (5) καιρός：「決定的な時、好機」「適切」「急所」
- (6) ピンダロス：前522/518～前442/438年。古代ギリシア最大の叙情詩人。ピンダロスについては、本継続研究 (2) II. 11.<注記と考察> (1)、本継続研究 (5) II. 2.<注記と考察> (6)、本継続研究 (9) II. <原文注記>の<注記と考察> (7→76)、を参照のこと。
- (7) ここの前後では、弁論術が本質的な関連をもったのは詩歌とであり、彫刻家や画家たちとはなかった、ということが述べられている。イエーガーはすでに序論で、「…しかしパイデアーの真の担い手は、ギリシア人たちの考えでは、声をもたぬ芸術家たち——彫刻家、画家、建築家——ではなく、詩人や音楽家であり、雄弁家 (政治家を意味する) や哲学者たちであった。」と述べ、「ギリシア人の考え方によれば、美術 (fine

art, die Kunst) は異なる範疇に属していた。古典期全体をとおして、それは宗教の領域に位置を占めたのであって、それは宗教から生じたのである。本質的に絵画や彫像は、*<agalma アガルマ>*、装飾品であった。」と指摘している(本継続研究(2) II. 11. 「古代ギリシアにおける教養の歴史と文学の歴史との一致」)。

- (8) このドイツ語版での記述は、英訳版と同じ趣旨であるが、「Als eine schöpferische Tat entzieht sie sich in ihren höchsten Leistungen der schulmäßigen Übermittlung. (それは、創造的な行為として、その最高のはたらきにおいては、学校の授業のような伝達ができない。)」となっている。つまり、雄弁術の本質は、教え、伝えられるものか、否かが問題とされている。
- (9) このドイツ語版での記述は、英訳版と同じ趣旨であるが、「Isokrates dennoch durch Rhetorik Menschen bilden will (イソクラテースは雄弁術によって人間を教育しようと思う)」となっている。つまり、イソクラテースの雄弁術の教育への意欲が語られている。
- (10) *παίδευσις* には「教えること、教育」「教養」という意味がある。したがって training を「教育」と訳しておく。
- (11) イェーガーは、教育過程に関する「三位一体」の考え方において、職業的な雄弁家たちが(「学習」や)「教育」を前面に押し出しているのに対し、イソクラテースは「教育」の位置を第三位に下げている、と確認している。
- (12) *ιδέα* (イデア) には、「形、姿」という意味を基本に、「種類、様態」、「(文学等の)形式」、プラトーン哲学における「原型、理想形、イデア」、などの意味をもつ(イェーガーは、古代ギリシア思想の本質は、この「形」「種類」を観ていこうとするところにあるとする)。

なお小池訳『ソフィストたちを駁す』16では、*ιδεῶν* (the elements) が「表現形式」と訳されており、そのすぐあとの *εἶδος* (「姿、形、形相」「種類、状態」「原像、理想、イデア」など) が「表現法」「表現の種類」と訳されている。

- (13) イェーガーのこの叙述は、教養思想における、諸能力(諸資質)の調和という考え方の、あるいは認識というものの、その生きて働く原理を考えさせる。
- (14) この箇所には、ドイツ語版には(英訳されていない)次の一文が入っている。

gemäß dem ihr selber innewohnenden Gesetz ihrer Struktur (、その [=魂] 構造のそれ自身に内在する法則に即して)

- (15) culture を(教育による)「修養」と訳しておいた。イソクラテースの弁論術の学校における教師としての仕事のことである。
- (16) rhetorik は「雄弁術」であり、「修辞学」「美辞学」であり、「レトリック」「美辞麗句」である。イェーガーは、この語がもつ二つの意味合いの歴史的な脈絡を指摘しているであろう。語源としての *ῥητορικὸς* は「弁論の、弁論家の、弁論に秀でた」の意味をもつ。なお、廣川洋一の2005年の著書は『イソクラテースの修辞学校—西欧の教養の源泉—』(講談社学術文庫、初版は岩波書店より、1984年)とされており、また松原著の「イソクラテース」の項目では、「前392年頃、アテナイに修辞学の学校を設立。」と説明されている。

ところで、rhetorik ということば自体は変わることなく使われ、その実際的な意味合

いは歴史的に変化をとげていくが、それが日本語に訳される場合、まったく異なる「雄弁術」、「修辞学」といった訳語があてられることになる。日本語訳に関しては、このような、もともとの語との意味関連が見えなくなるという問題がいつもある。

9. 雄弁家たちとイソクラテースの態度

<訳文> 65p~66p

彼は、教師の第三グループ、つまり法廷弁論代作者 (the writers of forensic speeches, die Schreiber der Gerichtsreden)、にはほとんど時間をかけない。明らかに彼は、彼らをもっとも無力な敵対者と見なしている——プラトンは、『パイドロス』において、つまりかなりの年月のあとに、彼ら (them, diesem Typus der Rhetorenschule 雄弁術学派のこのタイプ) を攻撃しており、したがって、その頃でも、彼らをかかなり重要と考えていたのであるが。イソクラテースが、彼らの敵対性は、彼が自分の究極の目的 (ideals, Bestrebungen 熱心な試み) にとっての真の脅威を認めている、新しい哲学的教養 (philosophical culture, philosophischen Bildung) のそれよりもはるかに危険ではない、と考えていることは明らかである。法廷弁論代作者 (the forensic speechmakers, die Gerichtsredenschreiber) はお金を得ようと努めていたのであり、つまり彼らの所産は実際的な利用が意図されていたのである。われわれは、彼らの技術 (technique, Praxis 実際) を、アンティポーン⁽¹⁾、リュウシアース⁽²⁾、イーサイオス⁽³⁾、デーモステネース⁽⁴⁾、さらにまたその経歴の最初のころのイソクラテース自身、によって出版された模範演説 (the sample speeches, den Musterreden) から知っている。この種の文学 (literature, Literatur) は、ギリシア文学の園の最も注目すべき草花 (plants, Blüten 花) の一つである——おまけにアッティケー原産の植物 (vegetable) である。アテーナイ人の訴訟熱 (mania for litigation, Prozeßwut) は、喜劇作家によって物笑いの種にされているが、アテーナイ国家の堅固な法治性 (Rechtsstaat 法治国家) に対応する：つまりその市民が非常に誇りとしたあの法に基づくということに。それ [=アテーナイ人の訴訟熱] は、*agones*⁽⁵⁾——訴訟 (lawsuits) と告発 (prosecution) ——への世間一般の関心を引き起こした。法廷弁論代作者たち (the logographers, der Logographen) によって書かれたこの模範演説 (the model speeches, die Musterreden) は、それらの著者の宣伝としても、彼らの弟子たちが模倣する模範としても、同時に公衆にとって面白い読み物としても、役立った。◀76▶ここでもイソクラテースは、若い世代のより鋭敏な (more sensitive, empfindlicher gewordenen より鋭敏になった) 審美眼をはっきり示している。⁽⁶⁾彼は皮肉に、法廷弁論代作者たち (the logographers) は、雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) のいちばん魅力のない側を誇らしげに世間の目立つところに引っ張り出す代わりに、それ [=雄弁術のいちばん魅力のない側] を展示するのを (to display, das Zurschaustellen)、雄弁術の敵対者たち (the enemies of rhetoric, ihren Kritikern その [=雄弁術のいちばん魅力のない側] 批判者たち) (すでに甚だ多数になっている) に任せるように勧める⁽⁷⁾；そうして彼は、雄弁術で学び得るものはどんなものも、法律論争におけるのとまったく同様に他の分野においても有益である、と言い足す (adds that)。⁽⁸⁾われわれはこの気持ちの (of this attitude, dieses Widerwillens この嫌悪の) 誠実さを疑う必要はない。それは、なぜイソクラテースがその仕事 (the profession, diese Betätigung この活動) を捨て去ったのかを非常に明瞭に説明する。彼は、法廷弁論代作者

(the speechwriter, die Redenschreiber) は倫理的に哲学者 (the philosopher) よりもはるかに低いと感じた。<77> 彼は彼ら全部を ‘政治的雄弁術の教師 (teachers of political oratory, der Lehrer der politischen Beredsamkeit)’ の名の下に含めているから、明らかに彼は、法廷用弁論執筆者 (die Verfasser der Gerichtsreden 法廷弁論の執筆者) のことだけではなく、あらゆる種類の雄弁家たち (rhetors, Rhetoren) のことを考えている。<78> 確かに、哲学の教育 (philosophical education, der philosophischen Bildung) において探究される主題は苦勞するだけの価値はない、そうして論争に ‘ふける (wallow)’ 争論家 (arguers, die Streitredner) は、もし彼らが自分たちの結論を実際の諸事実に適用しようとすれば、重大な危難に陥るだろう (ここでイソクラテースは、プラトーンの『ゴルギアース』のなかのカリクレスを引用しており、そして (まったく: ganz) 彼 [=カリクレス] の側についてもいる)、⁽⁹⁾ しかしともかく、雄弁家たち (rhetors, die Rhetoren) が高級な主題、つまり政治 (politics, die Politik) のことを話しているという事実が、実際上は彼らがたいいそれ [=その事実] を悪用し、口出しする野心的なでしゃばり (interfering and ambitious busybodies, zu betriebsamer Vielgeschäftigkeit und zu ungerechter Vergrößerung せかせかとしたたいへんな繁忙と不正な増大) になるということをはっきり知ることを、われわれに控えさせてしまってはいけない。このようにイソクラテースは、彼はプラトーンの明確な結論は受け入れないけれども、彼 [=プラトーン] の政治雄弁家 (the political orators) の批判において彼 [=プラトーン] に従う。彼 [=イソクラテース] は、美的センスが教えられ得るとは思わないのと同様に、徳 (virtue, der Tugend) が教えられ得るとは思わない。プラトーンは、徳を教えられないようなどんな教育にも、*techne* (専門的技術)⁽¹⁰⁾ の名称を授与することを拒否する; そしてイソクラテースはあからさまに、そのような [=徳を教えるような] 教育を生み出すことは不可能だと見なす。それにもかかわらず、彼 [=イソクラテース] は、政治的傾向の教育が、もしそれが、従来の雄弁家たち (rhetoricians, Vertreter der Rhetorik 雄弁術の主唱者たち) によって提示された非倫理的やり方ではなく、彼が推奨する方法で実行されるとすれば、ある倫理的な影響力 (some ethical influence, einen ethischen Einfluß) をもち得る、ということを認める気になっている。<79>

<注記と考察>

(1) アンティポーン：前480年頃～前411年。アテーナイの弁論家で、「[アッティケー十大雄弁家]のうち最も早く現れ」「弁論代作者 logographos の祖と称され、もっぱら他人の依頼で代筆した演説によって名声を得た。」という。(松原著)

logographos は λογο-γράφος「弁論作家」であるが、「弁論代作者」「法廷弁論代作者」とも訳されている。なお、小論<原文注記>46a. の<注記と考察>⁽⁶⁹⁾を参照のこと。

(2) リューシアース：前459/445年頃～前380/378年頃。アッティケー十大雄弁家の1人で、「法廷弁論代作者 logographos として生計を立てた」という。(松原著) なお、本継続研究(7) II. A. 1. の<注記と考察>(9)を参照のこと。

(3) イーサイオス：前420～前340年頃。アッティケー十大雄弁家の1人で「イソクラテースとリューシアースに弁論術を学び、法廷演説代作者としてアテーナイで活躍した。」という。(松原著) なお、本継続研究(11) II. 5. の<注記と考察>(2)を参照のこと。

- (4) デーモステネース：前384～前322年) アテーナイの雄弁家、政治家で「古代ギリシア最大の弁論家、アッティケー (アッティカ) 十大雄弁家の最高峰といわれる。」とされる。(松原著) なお、本継続研究 (11) II .5. の<注記と考察> (3) を参照のこと。
- (5) ἀγών (アゴーン) は、「(集会の) 広場 (アゴラのようなところ)」「競技場」「競技」「討論」「訴訟」などの意味をもつ。ここでは「訴訟」と理解しておく。
- (6) イェーガーは、イソクラテースを、ゴルギアース等と比較し次世代の者として説明している。
- (7) イェーガーは、『ソフィストたちを駁す』19~20. の内容のことを述べている。そこでイソクラテースは、「近年に続々と発生し、大言壮語に唱和してまだ日も浅いソフィストたち」に対し、「彼ら [=法廷弁論家たち] は、政治弁論 (πολιτικούς λόγους, political discourse) を呼び物にしなが、これに附随する他の善 (ἀγαθῶν, the good things) をすべて無視して、他人に干渉し財産をつけねらうことを教える者とみなされたのであった。」(小池訳) と書いている。なお『ソフィストたちを駁す』19~20. の全文は、<原文注記>の<注記と考察> (106) を参照のこと。
- (8) イソクラテースのここでの「言い足し」は、ドイツ語版では zumal da (だけになおさら) であり、その手前の主張の格別な根拠を説明している。
- (9) イェーガーはここでは、『ソフィストたちを駁す』20. の「たしかに後者 [=論争に忙殺されているソフィストたち] にあっては、その終始するところの議論は些末的で、これをひとが行動に移せばたちまちありとある災いに落ちるような性格のものではあるが、…」(小池訳) という箇所のことを説明している。そういう文脈でイェーガーが示唆している『ゴルギアース—弁論術について—』の箇所は、その482c~486dのカリクレスの長い発言のことと判断される。その中から、文脈を略して、下に短く引いておく (加来彰俊訳『ゴルギアース』、岩波文庫)。

カリクレス …というのは、いいかね、ソクラテス、哲学というものは、たしかに、結構なものだよ、ひとが若い年頃に、ほどよくそれに触れておくぶんにはね。しかし、必要以上にそれにかかざらっていると、人間を破滅させてしまうことになるのだ。なぜなら、せっかくよい素質をもって生れて来ても、その年頃をすぎてもまだ哲学をつづけていたのでは、立派なすぐれた人間となって、名声をうたわれる者となるのに、ぜひ心得ておかなければならないことがらを、どれもみな心得ないでしまうにきまっているからだ。すなわち、そのような人間は、国家社会に行なわれている法律や規則にもうとい者となるし、また、公私いろいろの取りきめにおいて、人びとと交渉するのに用いなければならない口上も知らず、さらに、人間がもついろいろな快楽や欲望にも無経験な者となるからである。つまり、一口でいえば、人さまざまのあり方について、まるっきり心得のない者になるからなのだ。だから、そんな状態で、公私いずれにもせよ、何らかの行動に出るようなことがあれば、物笑いの種になるだけであろう。…

なおカリクレスについては、訳者「解説」によれば、「彼の人となりや生涯については、この対話篇で述べられていること以外には全く知られない」ということである。

さてイェーガーは、「…その彼 [=イソクラテース] はその生涯の仕事に、実際には『プロタゴラス』と『ゴルギアース』が書かれたあとに、就いた。」(本継続研究11のII.

2) と叙述し、また「プラトーンは、早くも〔前〕四世紀の初めの10年間に『プロータゴラス』と『ゴルギアース』を執筆した。イソクラテースは自分の学校を390年より前には設立できなかったのであり、というのは彼の現存する演説において、われわれは彼の仕事を、少なくともその頃まで法廷弁論の代筆者としてたどることができる；ことによると、それは80年代にまで続いていたのかもしれない。」と注記し(本継続研究11のⅡ. <原文注記> 8.)、さらに「彼の入門的演説である『ソフィストたちを駁す』において、彼がプラトーンの‘設立趣意書’である『ゴルギアース』と『プロータゴラス』を自分の前にもっていて、それらとの対比において自分自身のパイダイアーの理想を掲げようと慎重に試みていることは明らかである。」(本継続研究11のⅡ. 5)と述べ、さらに重ねて「それ [=『ソフィストたちを駁す』] はプラトーンの『プロータゴラス』『ゴルギアース』の知識、そしておそらく『メノーン』の知識も、前提にしているのである。」(本継続研究11のⅡ. <原文注記> 32a.)と指摘している(この指摘はさらに重ねられている)。つまりイエーガーは、イソクラテースは『ソフィストたちを駁す』の執筆に際してはすでに『ゴルギアース』を読んでいたものと理解し、『ソフィストたちを駁す』の中にプラトーン(たち)に対する‘論争’を読み取っている。

それに対し『イソクラテース 弁論集2』の訳者である小池は、『ソフィストたちを駁す』17. で、「プラトン『ゴルギアース』463Aはこの箇所のパロディ。」という訳注を付しており(145p)、プラトーンの方が(その『ゴルギアース』執筆時には)『ソフィストたちを駁す』を読んでいた、と判断している。

また上記の岩波文庫『ゴルギアース』において、訳者は、ソクラテースの発言中の「弁論術とは「説得をつくり出すものであって、」という文言に、次のような注記を付している。

この定義はプラトンの創作ではなく、当時すでに広く世に知られていたものであったと思われる(古人によれば、それはすでにゴルギアースの師である、テイシアスやコラクスの言い出していたことであると言われ、またクインティリアヌスによれば、イソクラテースの言ったことであるとも言われる)。プラトンは後にそれを、「言論による魂の一種の誘導である」(『パイドロス』261a)というふう言い代えているが、アリストテレスもやはり弁論術を定義して、「それぞれの事柄について可能な説得の手立てを見てとる能力である」(『レトリカ』1巻2章)と言っている。

(10) τέχνη は、「わざ」「技術」「専門的技術」「技芸」「学問」などの意味をもつ。

(継続研究(14)へ続く)

<原文注記>

33. イソクラテース『ソフィストたちを駁す』1. ⁽⁴³⁾

34. もちろん‘philosopher’という語は、われわれが今日 philosophers と呼んでいるあのパイダイアーの代表者たち、つまりソクラテースの仲間たちであるが、そうした者たちに限定されない。それは、あらゆる種類の教養(culture, die Bildung)の偽りの教師たちを含んでいる(『ソフィストたちを駁す』11と18を参照のこと)。⁽⁴⁴⁾しかしそれは、『ソフィストたちを駁す』2. から分かるように、厳密な意味での哲学者たちを含んで

いるのであって、イソクラテースはそこで、彼らの‘truth 真理’を教えるという主張をあざ笑っている。それは、単に（何人かが考えてきたように）アンティステネースの著書 *Truth* (‘Aletheia’) だけではなく、すべてのソクラテースの学徒たちに向けられているのである。⁽⁴⁵⁾

35. 『ソフィストたちを駁す』 1. : οἱ περὶ τὰς ἐρίδας διατρίβοντες οἱ προσποιῶνται τὴν ἀλήθειαν ζητεῖν⁽⁴⁶⁾ ; 『アンティドシス (財産交換)』 261. : οἱ ἐν τοῖς ἐριστικοῖς λογίσις δυναστεύοντες. (47) 後者の文章で、‘争論家たち (disputers)’ は、幾何学や天文学——プラトーンのアカデーメイアで教えられていた両方の科目——の教師と同類に置かれている。Münscher の非論理的な仮定、つまり、後者の『アンティドシス (財産交換)』の演説では、イソクラテースは自分が争論家たちのことを述べる時読者が主としてプラトーンのことを考えるように計画し、しかし『ソフィストたちを駁す』の演説ではそうしていない、という非論理的な仮定は、『パイドロス』の早い年代設定と、イソクラテースと若いプラトーンとは友好的であったという推定、に基づいている (原文注記32a を参照のこと)。
36. 十中八九は、プラトーンが、自分の弁証法がイソクラテースのそれへの攻撃におけるように論争術 (eristic, der Eristik) と混同されているのに気づいたから、彼は『エウテュデーモス』で、ソクラテースを論争者たち (the eristics, den eristischen Klopffechtern 論争好きの著作家) と非常に鋭く明確に区別したのである。⁽⁴⁸⁾ 『国家』 499a ⁽⁴⁹⁾ で (でも : auch) 彼は、真の哲学者のことをだれも知らないという不平を繰り返し、彼 [=ソクラテース] を単なる争論家 (disputers, Streitredner 争論的演説家) と混同することから擁護しようと試みている。そこでは彼は、彼 [=ソクラテース] を、才気に満ちてはいても無意味である論争 (arguments, Wortgefecht und -streit 議論・言葉をめぐる言い争い) には何の喜びも見出さない、そして‘知識をそれ自身のために’求める、そういう人として叙述している。
37. いくつかの点でプロタゴラスはソクラテースによって達せられた論理的帰結に同意することを拒み、そうして彼は明らかに、自分の相手 [=ソクラテース] が自分を罠にかけようとしていると考えている。プラトーンはこのことをまったく客観的な方法で叙述し、そうしてそれによって、いかにソクラテースの弁証法が論争的と見なされ易いかを示す。同様にカッリクレス (プラトーン『ゴルギアース』 482ef. (50)) は、同一の論議の中で同じ概念に異なった意味を与えるという、ソクラテースの罠に抗弁する。このことに関しては、『パイデア』 II, 138 を参照のこと。
38. 『ソフィストたちを駁す』 2. ⁽⁵¹⁾
39. 『ソフィストたちを駁す』 2-4. ⁽⁵²⁾
40. プラトーンは、‘universal virtue (普遍的な徳)’ („die Gesamttugend : 純粋な徳“) を、正義 (justice, Gerechtigkeit)、勇氣 (courage, Tapferkeit) 自制 (self-control, Selbstbeherrschung) などのような ‘special virtues (特殊な徳)’ („Einzeltugenden : 個々の得“) と対照する。しばしば彼は前者を ‘virtue in itself (徳そのもの)’ (die Tugend an sich) (αὐτὴ ἡ ἀρετή) と呼ぶ——それは、彼の同時代者たちには一種の新しく風変りな表現である。〔以下は英訳版で補筆されたものである〕 In c.20でも、イソクラテースは、‘争論家たち’のパイデアーにおける倫理的要素を強調する；彼らは徳は教えられ得るということを断言する、と

- (21)、⁽⁵³⁾しかしそのことをイソクラテースとすべてのソフィストたちは手荒に否定する。プラトーン『プロタゴラス——ソフィストたち——』を参照のこと。
41. 『ソフィストたちを駁す』 5. ⁽⁵⁴⁾
42. プラトーン『ゴルギアース』 456e-457c, 460d-461a. を参照のこと。⁽⁵⁵⁾
43. 『アンティドシス (財産交換)』 215f. ⁽⁵⁶⁾ イソクラテースは雄弁術の教師たちを、弟子が不善 (evil, Schlechtes) を彼らから学んでいる、という非難から守ろうとする。〔以下は英訳版で補筆されたもの〕『ニコクレス』 2f. ⁽⁵⁷⁾ も参照のこと。
44. このことは、(実際に全般的理由から: auch aus allgemeinen Gründen) 二つの著作が執筆された年代 (年代関係: Zeitverhältnis) のもっともあり得る見解である。『ゴルギアース』は今日一般に、確かな根拠に基づいて、前395年から前390年の間に執筆されたと思われている; しかしイソクラテースは、その時代には、自分の学校を開設しているということはほとんどないのであり、というのは、われわれは彼の仕事は390年までは法廷弁論代人 (logographer, Logograph) ⁽⁵⁸⁾ として追うことができるのである。⁽⁵⁹⁾ それゆえに、演説『ソフィストたちを駁す』、それは彼の趣意 (programme, das Programm) を告げるものであるが、は80年代に執筆された。〔以下は英訳版で補筆されたものである〕何人かの学者たちは、『ソフィストたちを駁す』とプラトーンの『ゴルギアース』との年代順の関係を、プラトーンの対話篇中のイソクラテースの演説への間接的な言及と思われるものによって、確定しようと試みてきた。しかしたとえプラトーンが ψυχή στοχαστική (『ゴルギアース』 463a) ⁽⁶⁰⁾ のことを言い、イソクラテースが ψυχή δοξαστική (『ソフィストたちを駁す』 17) ⁽⁶¹⁾ のことを言っているとしても、そのことは、プラトーンがイソクラテースを模倣しているということを証明するものではない。それにまた、δοξαστικήはプラトーンの言葉遣いである。プラトーンは単なる δόξα (ドクサ) ⁽⁶²⁾ 軽蔑しており、しかるに此処やその他の箇所イソクラテースは、人間の本性 (man's nature) は人間に δόξα や δοξάζειν ⁽⁶³⁾ 以上のものに携わることを許さない、とつよく主張している。彼がプラトーンに応酬しようとしているという、まさにその事実が、彼が問題についてのプラトーンの定式化に依存している、ということを示している。しかし主な議論は、本文 (56f) ⁽⁶⁴⁾ で述べられていることである: つまり、『ソフィストたちを駁す』に含まれている、プラトーン的基本的な諸概念とそれら論理的な相互関係 (たとえば, πᾶσα ἀρετή::εὐδαιμονία, ἐπιστήμη::δόξα, ἀρετή::ἐπιστήμη) ⁽⁶⁵⁾ についての知識は、非常に豊かなものなので、それを引き出すことができたのは、プラトーンの初期の作品では、彼が自分の思想のかなり体系的な解説 (exposition) を与えている若い時代の唯一の著作『ゴルギアース』をおいてほかにはなかったであろう。⁽⁶⁶⁾
45. イソクラテースによって引き合いに出された彼 [=プラトーン] の哲学のあのような独特の要点 (features, Elemente 基本) のすべてを、更なる説得力と完ぺきさをもって説明し、それらの基本的な諸関係を非常に明瞭にする、プラトーンの初期の (別の: andere) 著作のどれかの名を挙げることは、いずれにしても、むつかしいだろう。⁽⁶⁷⁾
46. 『ソフィストたちを駁す』 6. ⁽⁶⁸⁾
- 46a. クセノポーン『言行録』 1.6.1f. ⁽⁶⁹⁾
47. 『ソフィストたちを駁す』 7. ⁽⁷⁰⁾
48. 『ソフィストたちを駁す』 8. ⁽⁷¹⁾

- 48a. 見下げ果てるほどのわずかな授業料を弟子 (pupils, Hörern 聴講者) に求めたことへの非難は、おそらく、十中八九は授業料をまったく取らなかったであろうプラトーンよりも、アンティステネースに妥当する。しかしわれわれは、このことについては、確信をもって判断するにはあまりにもわずかなことしか分かっていない。ことによるとアカデーメアにおいてさえ門弟たちはわずかの額を納めなければならなかったかもしれない——たとえば、彼らの酒宴 (the symposium) の費用負担。(そもそも: überhaupt) これは彼らの教師の給与 (the salary, eigentliches Honorar 本来の報酬) を意図したものでなかったのであるが、しかしソクラテースはそれを、あたかもそうであるかのように叙述しようと決めたのかもしれないのであり、そうして (そこから: daher) プラトーンが自分の競争相手 (competitors, der Konkurrenz) を安く見ているということを暗示しようと決めたのかもしれない。〔以下は英訳版で補筆されたものである〕彼 [=イソクラテース] は、『ヘレネ頌』でプラトーンとアンティステネースを再び攻撃している⁽⁷²⁾: 原文注記85. を参照のこと。ソクラテース学徒たちの授業料については、ディオゲネース・ラーエルティオスの2.62, 65, 80, そして6.14を参照のこと。⁽⁷³⁾
- 48b. 弁証法が些末であるという非難は、『アンティドシス』262⁽⁷⁴⁾で繰り返されており、そこではそれは、一般の認めるようにプラトーンへの攻撃となっている。どうして、ここ (here, in der Sophistenrede 『ソフィストたちを駁す』) でも、それがプラトーンへの攻撃ではないというのか。⁽⁷⁵⁾
49. この、矛盾を見出す技術 (the art of discovering contradiction, die Widerlegungskunst 反駁の技術) の、つまり ‘elenctic 詭弁の’、叙述は、ソクラテースとプラトーンに向けられている。『ヘレネ頌』4の類例を参照のこと、そこではソクラテースの専門用語である ἐλέγχειν がとくに嘲弄されている。⁽⁷⁶⁾
50. 『パイデア』II, 39を参照のこと、そこはソクラテースの全教育的活動の目的が ‘魂の世話 (caring for the soul, Sorge für die Seele)’ (ψυχῆς ἐπιμέλεια) だと見なされ得る次第を説明している。⁽⁷⁷⁾
51. 『ソフィストたちを駁す』9: οἱ τοὺς πολιτικούς λόγους ὑπισχνούμενοι.⁽⁷⁸⁾
52. イソクラテースの表現法は明らかに、彼がテクネーという語を (これらの弁論術教師たちによって使われているように)、いわば、引用符の中に置いていることを物語っている。同じことが、彼がソクラテースの用語法をもじって茶化す箇所の記事に適用される。
53. 〔この原文注記は英訳版で追加されたものである〕『パイデア』II, 131,⁽⁷⁹⁾ その他諸所に。
54. J.Vahlen, *Gesammelte Schriften* I, p.117f. を参照のこと; 〔以下は英訳版で追加されたもの〕また彼の前のものとして、C.Reinhardt, *De Isocratis aemulis* (Bonn1873) を、参照のこと。
55. この演説は、アルキダーモスの、イソクラテースによって演説『ソフィストたちを駁す』の中で彼 [=アルキダーモス] に対してなされた攻撃、への返答として一番よく説明され得る。
56. 『ソフィストたちを駁す』9.⁽⁸⁰⁾

57. 『ソフィストたちを駁す』 10. ⁽⁸¹⁾
58. 『ソフィストたちを駁す』 12f. ⁽⁸²⁾
59. プラトーンは、『クラテュロス—名前の正しさについて—』『テアイテトス—知識について—』『政治家—王者の統治について—』『法律—立法について—』で、自分の‘イデア’をアルファベットの文字 (letters of the alphabet, den Stoicheia) にたとえている。⁽⁸³⁾
60. このことはプラトーンの『ティマイオス』 48b,56b,67e で初めてなされた: H.Diels *Elementum* を参照のこと。⁽⁸⁴⁾
61. 『ソフィストたちを駁す』 12. ⁽⁸⁵⁾
62. 『ソフィストたちを駁す』 13の *καίρος* と *πρέπον* について、参照のこと。⁽⁸⁶⁾
63. 『ソフィストたちを駁す』 12. ⁽⁸⁷⁾
64. イソクラテースは『アンティドシス (財産交換)』 2で、自分を彫刻家ペイディアース、画家ゼウクシスとパラシオス、と比較している⁽⁸⁸⁾——彼らはギリシアの偉大な芸術家たちである。〔以下は英訳版で追加されたもの〕 So does Plato in *The Republic*: see *Paideia* II, 158f. ⁽⁸⁹⁾
65. プラトーンも、『ゴルギアース』 502cにおいて、詩歌 (poetry, die Poesie) が一種の雄弁術 (rhetoric, der Rhetorik) だと見なしている。⁽⁹⁰⁾
66. 『ソフィストたちを駁す』 1. ⁽⁹¹⁾
67. 『パイデア』 II, 59 f. ⁽⁹²⁾〔この原文注記は英訳版で加えられたものである〕
68. 『ソフィストたちを駁す』 1と 8. ⁽⁹³⁾
69. 『ソフィストたちを駁す』 14. ⁽⁹⁴⁾
70. 『ソフィストたちを駁す』 15. ⁽⁹⁵⁾
71. 『ソフィストたちを駁す』 16. ⁽⁹⁶⁾
72. 『ソフィストたちを駁す』 17. ⁽⁹⁷⁾
73. 『ソフィストたちを駁す』 18. ⁽⁹⁸⁾プラトーンも『国家』 473d⁽⁹⁹⁾、そして『法律』 712a⁽¹⁰⁰⁾で権力 (power, Macht) と知性 (intellect, Geist) の‘一致 (coincidence, Zusammenfallen)’のことを話している。しかしまた、そのことばを使うことなく、彼は多面的な才能の理想 (ideal, Ideal) を提示する (『国家』 485bff.⁽¹⁰¹⁾) ——つまり、*φιλόσοφος φύσις* (哲学者たちの自然的素質⁽¹⁰²⁾) のことであり、それ (which, deren Wesen その本質) は、調和して (together, vereinbarer) 存在し得るがめったに調和することのない性質の一致 (a coincidence, der Koinzidenz) のことである。理想の定式化 (formulating ideals, der Idealbildung 理想の形成) のこのやり方は、パイデアーに関する文献 (the literature of paideia, der Paideialiteratur) に特有である。
74. 『ソフィストたちを駁す』 18. ⁽¹⁰³⁾
75. 『ソフィストたちを駁す』 17, *ψυχή δοξαστική* について。⁽¹⁰⁴⁾
76. イソクラテースは、もしこれらの模範演説 (model speeches, die Gerichtsredenliteratur 法廷演説著作物) がそれらの著者によって使われる教授法 (the teaching technique, ihres Unterrichts 教授) の見本であることが意図されているとするならば、それらは、彼 [= イソクラテース] 自身の政治的雄弁術およびその作品とまったく同様に、パイデアーの明確化 (the definition of paideia, Paideia) の一部になる、と考えている。結局、

その種の文献は、それ自体、貴重で興味深い、ある公式的な教育の原理 (a formal educational principle, ein rein formales Bildungsprinzip ある純粋な公式的教育原理) を代弁している。しかしながら、その内容は比較的に重要性が低いので、ここでは立ち入っては扱われなかった。このことについては、私はプラトーンとイソクラテースの評価を受け入れている。[以下は英訳版で追加されたもの] 一般的、法律的分野を対象とする歴史家は、もちろん違った見方をするだろう。⁽¹⁰⁵⁾

77. 『ソフィストたちを駁す』 19-20.⁽¹⁰⁶⁾

78. 『ソフィストたちを駁す』 20.

79. 『ソフィストたちを駁す』 21.⁽¹⁰⁷⁾

<注記と考察>

(43) イソクラテース『ソフィストたちを駁す』 1. は下記のとおりである (小池訳)

教育 (παιδεύειν, education) を手がける人の誰もがみな、真実を率直に語ることを心がけて、できもしない誇大な約束を揚言しなかったならば、かくも一般の人びとから悪評を立てられることはなかったであろう。しかるに彼らはあまりに軽率に、大言壮語に終始する。かくして思慮のほどを比べれば、怠惰な暮しを選んでいる者のほうが、哲学 (τὴν φιλοσοφίαν, serious study) に熱心な人間よりよほどまさと評されている。

いづくにあっても忌み嫌われ、また蔑まれる教師の筆頭に挙がるのは、日がな論争のための論争に時を費やしている者らである。彼らは真理を追求すると称しながら、表看板を掲げたそもそものはじめから、空虚な論をもてあそんでいる。

(44) イソクラテース『ソフィストたちを駁す』 11は下記のとおりである (小池訳)。

私は、哲学 (τὴν φιλοσοφίαν, philosophy) が彼らの言うだけの力を発揮することを、千金にも替えがたく思う。まことに彼らの言うとおりであれば、愚生にしてもこの学問の最後尾に取り残されて最小の利益しか享けないということもなかったであろう。しかるに実情はこれに反するのであるから、彼らの妄言がやむことを望んで許されよう。現に見るところ、正道を踏みはずした者に非難が浴びせられるだけでなく、この学問に時を費やしているすべての人が中傷を受けているからである。

またその18は下記のとおりである。

その跡を追い、巧みにまねることのできる者はすぐにも、よそには見られない文辞の華麗と雅味を体得するであろう。そしてこれらの条件がすべてそなわったとき、哲学する人 (ἐξουσιν οἱ φιλοσοφοῦντες, the devotees of philosophy) は完成の域に達するであろうが、いま挙げた条件のどれかが足りないときは、哲学に親しんでも、必ずや劣った状態に低迷せざるをえないだろう。

(45) イソクラテース『ソフィストたちを駁す』 2. は下記のとおりである (小池訳)。

思うに、未来の予知 (τὰ μέλλοντα προγινώσκειν, foreknowledge of future events) が人間の本性 (τῆς ἡμετέρας φύσεως, our human nature) 超えていることは誰の眼にも明らかではないか。そのような賢慮はわれわれの遠く及ぶところではなく、ゆえに知恵にかけて並びない名声を博しているホメロスも、ときには神々でさえ未来に

ついてあれこれ思慮をめぐらすこともあると考えて、その情景を描写している。もちろん、ホメロスが神々の抱懐するところを知っていたからではない。未来の予見が人間に不可能なことの一つであることを、われわれに示そうとしたのである。

なお、上記(43)で引いた1.の後段の「日がない論争のための論争に時を費やしている者ら」の箇所、訳者は「問答相手から矛盾撞着を引き出す論法を工夫し、その技を競った。ソクラテスの影響を受けたアンティステネス、エウクレイデスなどが念頭に置かれていると考えられる。…」と注記している。イエーガーは、イソクラテースが批判している相手は1.のアンティステネス(たち)だけではなく、2.の叙述から、「真理」を探究する者を含む全体だと指摘しているのであろう。なおアンティステネスに関しては本継続研究(7)Ⅱ.1.<注記と考察>(3)を参照のこと。

- (46)『ソフィストたちを駁す』1.でイエーガーが引いている箇所は、ローブクラシカルライブラリーの英訳では、who devote themselves to disputation, since they pretend to search for truth,であり、下記の和訳(小池訳)の「」の部分である。

いづくにあっても忌み嫌われ、また蔑まれる教師の筆頭に挙がるのは、「日がない論争のための論争に時を費やしている者らである。彼らは真理を追求すると称しながら」、表看板を掲げたそもそものはじめから、空虚の論をもてあそんでいる。

- (47)『アンティドシス(財産交換)』261.でイエーガーが引いている箇所は、ローブクラシカルライブラリーの英訳では、who are skilled in disputationであり、下記の和訳(小池訳)の「」の部分である。

「争論的言論に長けた人びとも」、また天文学や幾何学やその他の学問研究に集中している人びとも害毒を流しているわけではなく、その弟子を益するものだと私は考えている。ただし、彼らが約束しているほど大きな益ではなく、また門外漢に思われているほど小さな益でもない。

- (48)『エウテュデーモス』については、『プラトン全集8』(岩波書店、1975年)の訳者(山本光雄)は、その解説文で、「この対話篇の執筆年代はいわゆる初期、それもその期の後の方に『メノン』などと一緒に属すると考えられる。」と説明している。この対話篇は、サブタイトルとして、「H ΕΠΙΣΤΗΚΟΣ ΑΝΑΤΡΕΙΤΙΚΕΣ ΟΝ ΔΙΣΠΥΤΑΤΙΟΝ:ΡΕΦΥΤΑΤΙΒΕ——争論家——」が付されて伝えられてきている。

- (49) イェーガーが引く『国家』499aは、アデイマントスのことばにソクラテースが応答する部分で、下記のとおりである(藤沢令夫訳、岩波文庫(下))。

「かといって、君、言葉のほうにしても、高尚で(καλῶν, fair) 自由な(ἐλευθέρων, free) 討論——知ることを目指し、あらゆる努力をつくしてひたすら真実(ἀληθές, the truth)だけを追求するような討論、そして、法廷においても個人的な集まりにおいてもただもっぱら思わく(δόξαν, opinion)や口論(ἔρις, strife)を目標とする、手のこんだ論争技術めいたものは、いっさい敬遠するような討論のことだが——そういう討論となると、彼らはあまり聞いたことがないのだ」

「その点もまた、おっしゃるとおりです」と彼は言った。

- (50) イェーガーが指示するプラトーン『ゴルギアース——弁論術について——』482ef.は、カッリクレースがソクラテースの対話法に異議申し立てをしている箇所であり、

その一部を、文脈の説明を略して、下記に引いておく（加来訳、岩波文庫）。

ところが、今は逆に、ポロス自身がそれと同じ羽目におちいることになったのだ。そこで、ぼくとしては、不正を行なうほうが不正を受けるよりも醜いということ、彼があなたに容認したという、まさにその点では、彼をほめるわけにはいかないのである。なぜなら、その点を同意したからこそ、今度は彼自身が、話をしているうちに、あなたによって足枷をかけられて、まるで馬銜をつけられたかのように、口もきけなくさせられてしまったのだ。それは彼が、心に思っていたとおりのことを、そのまま口に出して言うのを遠慮したからなのである。つまり、あなたという人はほんとうに、ソクラテスよ、真理を追求していると称しながら、そのような卑俗で、俗受けのすることへ、話をもっていかれるのだからなあ。そのようなことは、自然の本来（ピュシス）においては美しいものではなく、ただ法律習慣（ノモス）の上でだけ、そうであるにすぎないものなのに。

(51) 上記 (45) に同じ。

(52) 『ソフィストたちを駁す』 2-4. の 2 は上記 (45) で引いたので、その 3. 4. を下記に記す。

3. しかるに彼らは無謀に走り、若者に対して、自分たちと親しく交際するならば何をなすべきかを知り、その知識によって幸福になるだろうと説得に努めている。しかもまた、かくも大きな善を教え、配給する者であると自負しながら、その報酬に 3、4 ムナの小額を要求して恥ずかしいとも思わない。

4. 彼らといえども、他の物品を商って対価の何分の一にも足りない値段をつける者がいたならば、狂気の兆候を認めることに異論はなかったであろう。対して徳の全体と幸福の価値をそれほど低く見積もっておきながら、徳を教えると称しても精神の正常を疑われたいと思っている。彼らは富を名指して、「はした銀」とか「不浄金」とか呼んで、金銭などは不要のものであるかのごとく囁きながら、わずかの儲けを必死で追求め、教えを受ける者に不死の約束をも与えかねない。

(53) 原文注記で In c.20 と指示されているものを、『ソフィストたちを駁す』 20 と理解しておく。20. と 21. は以下の通り。

20. ましてこの教養のはたらきは、法廷弁論よりはむしろそれ以外のあらゆる言論を益する力をもっている。彼らは論争に忙殺されているソフィストたちと比べても、はるかに劣る。たしかに後者にあつては、その終始するところの議論は些末的で、これをひとが行動に移せばたちまちありとある災いに落ちるような性格のものではあるが、しかし教えの表看板に徳と克己節制を掲げている。対して彼らは、政治弁論を呼び物にしながら、これに付随する他の善をすべて無視して、他人に干渉し財産をつけねらうことを教える者とみなされたのであった。

21. しかしながら、この哲学が課している本来の指令に従おうとする者は、雄弁よりもむしろ品性の涵養の点ですみやかに益を受けるだろう。ここで私が正義は教えられるものと主張していると誤解してはならない。一般的に言って、生まれつきの徳の素地が劣悪な者に克己節制や正義を植えつける技術はどこにもない。とはいえしかし、徳に向けて何よりの励みとなり助けともなるのは、思うに、政治的弁論を修めることであろう。

なおイソクラテースの、この20. 21. と手前の19. の文章を読む限りは、イエーガーが原文注記で「イソクラテースとすべてのソフィストたち」と述べている「すべてのソフィストたち」とは、19. に言う、「近年に続々と発生し、大言壮語に唱和してまだ日も浅いソフィストたち」ではなく、「われわれより前の時代にあつて、いわゆる「技術」の書を世に問うたソフィストたち」（訳文注記では「コラクス、テイシアス、プロタゴラス、ゴルギアスなど」とされる）のことになるだろう。

(54) 以下に、イエーガーが指摘している『ソフィストたちを駁す』の5. とともに6. も引いておく。

5. 報酬を請求して正当な相手には、これに正義の徳を授けてやろうとしたはずが、まったく信を置かず、他方かつて一度も教えたことのない相手に、弟子から取った謝礼を委託する。財産の保管には重々思慮を怠らず、他方しかし、先におのれが与えた約束とはまるで反対のことをしている。

6. もとより、他の事柄を教える人であれば、争いの種になることについて細心の配慮を払って当然であろう。技能に秀でた者が賃貸の機微について明敏であっても、異とするにはあたらない。しかるに、徳と節制をつくりだそうとする人でありながら、自分の弟子が誰よりも信用できないのでは、まるで話にもなるまい。世間一般に交わるときは気高く正しい人物が、自分を育てた師に対するときには平気でこれを欺く、ということはないと思うが。

(55) 『ゴルギアース』456e-457c, 460d-461a. に関しては、要点だけを確認することとし、その一部を抜粋して引いておく（加来彰俊訳、岩波文庫、1967年）。

457b-c : (ゴルギアースの発言)

…格闘の術を用いる場合もそうであったように、弁論術も正しく用いなければならぬのだ。しかしまた他方、誰かが弁論の上手な者となり、そこでその能力と技術とによって、不正を行なうことがあるとしても、教えた者を憎んだり、国家から追放したりすべきではないとわたくしは考える。というのは、教えたほうは、これを正しく使用するようという意図で授けたのだが、習った側の者が、それを逆用しているからである。だから、そのように正しくない仕方を使用する者を憎んだり、追放にしたり、また死刑にしたりするのは、これは正当であるけれども、教えた人にそんなことをするのは、正当ではないのである。

460e-461a : (ソクラテースの発言)

ですから、わたしとしては、あなたがあのときにそのように言われた際には、弁論術というものは——それはいつも正義について論ずるものだとすれば——決して不正なことをなすものではありえないだろうというふうな、受け取っていたのでした。ところが、少し後になって、弁論家は弁論術を不正に使用することもあるだろうと言われたので、それでわたしは驚いてしまって、そしてそれらの言葉は互いに調和しないと考えたものですから、あのようなことを言ったわけでした。(…中略…) ところで、その後で、わたしたちがよく調べてみた結果は、あなたが自分でもごらんになっているとおり、弁論家が弁論術を不正に使用して、そして不正を行なおうとすることは、不可能であるということに、わたしたちはあらためて意見の一致を見たわけです。

- (56) 『アンティドシス (財産交換)』 215f. について、イエーガーの指摘を確認するために (前後の脈絡も略し)、215から219までの叙述より、短く引いておく (小池訳)。

…次の讒訴を取り上げることにはしたい。それは哲学を侮りこそしないが、かえって敵しい告発で、ソフィストを僭称する者たちの悪徳を、これとは何ら共通するところのない仕事に専心する人びとに転嫁している。私は、言論の教育を行なうと公言しているすべての人を弁護するものではなく、ただ正当にそのような評判を得ている人びとのためにのみ、弁じるつもりである。…さらにまた、弟子をそのような劣悪漢に育てて家に戻したならば、われわれが驚嘆されたり大きな名譽にあずかることはなく、むしろ逆に他の悪徳の元凶よりも激しく憎まれ蔑まれたであろう。また、これらの非難を免れたとしても、このような教育を主宰する者が多額の報酬を獲得することもできないであろう。

- (57) 『ニコクレス』 2 f. の中から、2.3.4.5. の叙述を引いておく (小池訳)。

2. さらに奇妙なことだが、われわれが神々を敬い正義を修めまたその他諸徳に精励するのも、ひとよりも少ない分け前に甘んじるためではなく、できるかぎり多くの善を享受して生涯を送らんがためであることを、よもや彼らが忘れてはいるはずはあるまい。それゆえ、徳に背くことなく利得を挙げるならば、その仕事そのものは非難にあたらぬ。むしろ咎めるべきは、行為において罪過を犯す者、あるいは言論によってひとを過たせ、不正に言論を用いる者である。

3. 先のような見解の持ち主が富や力や勇気を悪しざまに言わないのは、まことに不思議である。なぜなら、もし罪を犯す者や偽り欺く者のゆえに言論に敵意をもつのであれば、他の善にしても彼らの責めるところとなってよさそうなものだからである。これらを所有していても罪を犯す者はいるし、またそれを利用して大勢に危害を加える者もいるからである。4. それはともかく、出会った相手をいきなり殴る者がいるからといって力を非難するというのは正当ではないし、また罪咎のない人びとを殺す者のあるがゆえに勇気を誹謗するのも、また一般に人間の犯す悖徳を事に転嫁して罵倒するのも正しいことではなく、責められてしかるべきものは、善を悪用し、同国の市民を益することができるまさにそのものによって危害を加えようとする当の人間である。

5. しかるに彼らは、個々の例についてこのような区別を等閑にしてすべての言葉に敵対し、言葉の能力を嫌忌するといふはなほだしい誤謬に陥り、これこそが人間の性にやどるあらゆるものの中で最大の善の原因となるものであることに気づかない。まことに他の能力をもってしては、われわれは動物と選ぶところはなく、早さや力やその他の運動能力では多くの獣に劣っている。

- (58) λογο-γράφος : 弁論作家

- (59) 廣川洋一は、イソクラテースによるキオス島での学校創設の古伝のことに触れ、それは「前392~前391年のことであったと推定されている」と紹介し、それはイソクラテースの「<ロゴグラポス>時代の末期ということになる」と説明している。そうしてイソクラテースがアテーナイに弁論・修辭学校を設立したのは「おそらく前390年頃であったとみられる。」と説明している (廣川『イソクラテースの修辭学校——西歐的教養の源泉——』講談社学術文庫、2005年、1984年に岩波書店から刊行されたものを文庫化

したもの)。なお、松原國師は、イソクラテースの説明文で「前392年頃、アテナイに修辞学の学校を設立」と記している(松原著)。また『プラトン全集 別巻 総索引』(岩波書店、1978年)の「年譜」の「前399年 [(プラトン) 28歳] ~前388年 [39歳]」の項には、「イソクラテースがアテナイに学校を開き、弁論術を中心とした教育活動を始める(前392年)。」という記述がある。

- (60) 『ゴルギアース』463aは、ソクラテースの発言の途中からであり、下記のとおりである(加来彰俊訳、岩波文庫)。

ソクラテース …しかしぼくとしては、いいかね、ゴルギアースさんの扱っておられる弁論術が、ぼくの言おうとしているものにあたるかどうかは、知らないのだよ。だって、さっきの話からも、この人がいったいそれを何と考えておられるかは、われわれには少しも明らかにならなかったのだから。しかし、ぼくが弁論術と呼んでいるものは、何ら立派なもの部類にははまらない、ある事柄の一部門なのだ。

ゴルギアース というと、ソクラテース、その事柄というのは、何のことかね。いつてくれたまえ。わたしにはひとつも遠慮することはないよ。

ソクラテース それなら、言わせてもらいますが、ゴルギアース、わたしにはこう思われるのです。それは、技術の名に値するような仕事ではないが、しかし、機を見るのに敏で、押しがつかよくて (ψυχῆς δὲ στοχαστικῆς καὶ ἀνδρείας, a shrewd, gallant spirit)、人びととの応対に生まれつきすごい腕前を見せるような精神の持主が、行なうところの仕事なのです。そして、その仕事の眼目となっているものを、わたしとしては、迎合(コラケイアー)と呼んでいるのです。…

なお、ここで使われている στοχαστικόςは、「明敏な」という意味をもつ(shrewdは「明敏な」「抜け目のない」という意味をもつ)。

- (61) 『ソフィストたちを駁す』17の最初の一文は下記のとおりである(小池訳)。

…これらは細密細心の配慮を必要とし、果敢と実際の判断に富む魂(ψυχῆς ἀνδρικήs καὶ δοξαστικῆς, a vigorous and imaginative mind)の仕事である。

なお、ここで使われている δοξαστικόςは、「憶断的な」「表面的にそう見えるだけの」「想像力の豊かな」という意味をもつ(imaginativeには「想像力に富んだ」という意味が、またその原形の imagine には「…と推量する、見当をつける」という意味がある)。

- (62) δόξαは「信念、(主観的な)考え、判断」「推測、想像、憶断」「想念、幻影」などの意味をもつ。

なおイェーガーはこの原文注記で「プラトーンは単なる δόξα を軽蔑しており」と述べているが、そして事実、プラトーンの諸対話篇においてドクサは批判の対象となっているが、プラトーンは『メノーン』(98C)において、「正しい思わく: ὀρθὴ δόξα (right opinion)」という言い方をしている(拙論「想起に関する研究——社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて——」の「二「教えられ得るもの」と「教えられ得ないもの」」、都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月、所収、pp.84~85)。

- (63) δοξάζωには「思う、推量する、思いなす、想像する」という意味がある。

- (64) 小論6節のことである。

- (65) イェーガーが、イソクラテースの『ソフィストたちを駁す』に含まれていると指摘する対比の意味は次のようになる(カッコ内は使用例)。

πάσα ἀρετή 「徳の全体」 :: εὐδαιμονία 「幸福」 (「至福」)

(4. σύμπασαν δὲ τὴν ἀρετὴν καὶ τὴν εὐδαιμονίαν, the whole stock of virtue and happiness)

ἐπιστήμη 「知識」 (「知、学知、学問」) :: δόξα 「臆断」 (「思わく、推測、信念」)

(8. ταῖς δόξαις…τὴν ἐπιστήμην, judgements…knowledge)

ἀρετή 「美德」 (「すぐれていること、勇気、幸福」) :: ἐπιστήμη 「知識」

(66) イェーガーは、イソクラテースが読んでいたに違いないとするプラトーンの対話篇について、その初期のものと評されている作品群のなかの、そのおしまいの方に位置づくとしてされている『ゴルギアース』以外には考えられない、と推量している。

(67) ここで原文注記されていることは、原文注記44. の、英訳版で補筆された部分と同じ趣旨をもっていると判断される。

(68) 『ソフィストたちを駁す』 6. は下記のとおりである (小池訳)。

もとより、他の事柄を教える人であれば、争いの種になることについて細心の配慮を払って当然であろう。技能に秀でた者が賃貸の機微について明敏であっても、異とするにはあたらぬ。しかるに、徳と節制をつくりだそうする人でありながら、自分の弟子が誰よりも信用できないのでは、まるで話にもなるまい。世間一般に交わるときは気高く正しい人物が、自分を育てた師に対するときには平気でこれを欺く、ということはないと思うが。

(69) クセノポン 『言行録』 1.6.1は、次のようなクセノポンの語りから始まる (佐々木理訳、岩波文庫『ソクラテースの思い出』)。

彼 [= ソクラテース] が学匠のアンティフォーンと交わした会談も、彼のために書き落としてはならぬものである。あるとき、アンティフォーンはソクラテースの弟子たちを自分の方へ取って行こうと考えて、彼のところへやって来て一同のいる前で次のように言った。

「ソクラテース、私は愛智者 (τοὺς φιλοσοφῶντας, those practicing philosophy) と言うものは元来幸福に (εὐδαιμονεστέρους, grow happier) ならなくてはならぬと思っている。ところで君を見ると、まさに愛智のために逆の結果を得ているようだ。何はともあれ君は奴隷ですら主人にこんな扱いをされたら逃げ出すような暮しをしている。食べる食物と飲む飲物はこの上なくお粗末であり、衣服は単に粗末なばかりでなく、夏も冬もおなじ物を着とおし、履き物なし下着なしですごしている。それからまた、金は取ることがすでにうれしいものであり、取ればまた生活を一層自由な楽しいものにするものであるが、君は金も取らぬ。ともかくほかの仕事の師匠たちは、自分の弟子たちを己れの模倣者に仕立てあげるが、君もそれとおなじように自分の弟子たちを扱うとしたら、君は不幸せを教える先生であると思うがよろしい。」

1.6.1のパートは、このようなアンティフォーンの問いかけにソクラテースが応答するといったふうに会話が進んでいくが、その主題はほぼ同じである。それで、そのソクラテースの応答の一箇所を選択し下記に引いておく。

ソクラテースはこれに答えて言った。

「アンティフォーン、われわれの間では、美貌 (τὴν ὄραν, beauty) と智 (τὴν

σοφίαν, wisdom) とは、これを人に与えるのに、どちらもおなじように美しくも、おなじように醜くも、与えることができると考えている。なんとすれば、美貌を金で誰にでも売る者があれば、これは売春 (πόρνον, prostitution) と呼ぶのである。しかし愛人があって、それが君子人であると知るとき、これと親密な友人になることは、立派なこととわれわれは考えるのだ。智もまた同様であって、これを誰にでも金で売る者は〔売春と同じに〕 学問屋 (σοφιστὰς, sophists) と呼ぶのである。しかし、自分が見てよい天賦を持っていると知る者に、己の知っている良い事をみな教えて、そしてこれを自分の友人にする人は、善美の市民にふさわしい行為を行なう者と、われわれは考えるのだ。そしてまた私も、アンティフォーン、人が良い馬や良い犬や鳥を愛好するのと、おなじように、あるいはそれにもまして、良友を愛好し、そして自分が何かよいことを知って居ればこれを伝授し、また彼らが美德に進む助けになると思われる人々にも推薦して、その友達とならせる。そして古えの賢人たちが書卷に書きのこしてくれた宝は、これをひもといて友人たちとともに閲読し、もし何か良いことを見つければわれわれはこれを抜萃し、そして互いに裨益し合うことができるのを、無上の得と考えるのである。』

彼のこの言葉を聞いて、私 [=クセノポーン] は彼が実に自ら至幸至福の (μακάριος, happy) 人であり、かつ彼の話聴く人々を君子の道に導く人であるのを感じたのである。

なお念のためにということであるが、上述で「美貌」と訳されている ὤρα には、「春」[「人生の春、若さの盛りの時期」「青春の美しさ」という意味がある。また、クセノポーン (前430/428年頃～前352年頃) とその『言行録』については、本継続研究 (7) II. A.1. の<注記と考察> (2) (7) を参照のこと。文中に登場するアンティポーンは、松原著によれば、前430年頃に活躍したアテーナイのソフィストで、同名の、「弁論代作者 logographos の祖」と称されるアテーナイの弁論家 (前480年頃～前411年) と「しばしば混同され」、また「同一人物説もあり」ということである。

(70) イェーガーが指示する『ソフィストたちを駁す』7. は下記のとおりである (小池訳)。

7. それゆえ、やがて一般の人 (τῶν ἰδιωτῶν, the layman) も、これらすべてを考えあわせれば、知恵を教え幸福を授けようとする人びとの実態を見抜くだろう——彼らは実際は多方面で窮乏していて、弟子を取ってもわずかな稼ぎしかない、また矛盾撞着を言論のうちに目ざとく指摘しながら、ひろく行為において見抜くだけの力がない、さらには未来に関して知ったかぶりを装い、

(71) イェーガーが指示する『ソフィストたちを駁す』8. は下記のとおりである (小池訳)。

8. 現在に関しては必要なことを何ひとつ言うことも忠告することもできない、むしろ常識的判断をとる人のほうが、知識をもっていると公言している人よりも一貫性があり的確な判断を下すのではないか。ここに至って、思うにおそらく当然のことであるが、一般の人びとはくだんのごとき談論が魂を配慮することとは認めず、無駄話や細かい穿鑿とみなして軽蔑するだろう。

(72) イェーガーが指摘する『ヘレネ頌』は、次の文章のことであろう (イソクラテース

は文章でプラトーンとアンティステネースの名前は明示していない)。

1 奇抜で意表をつく主題を思いついて、何とか聴くにたえる話が展開できれば、おおいに得意になる人びとがいる。老齡を迎えてなおかつ、あるいは「虚偽も反論もまた同じ事柄についての両論も不可能である」と主張し*、あるいは「勇気も知恵も正義も同じ一つのことである」と論じて、本来われわれは、それらのどれも別に単独にもつものでなく、そのすべてにわたる知識は一つであると詳細に弁じ、またあるいは周囲の者を煩わすだけの無益な論争にうつつを抜かしている。

6 しかし実のところ、彼らは若者を相手の金稼ぎにしか関心がない。もっぱら論争に関わる哲学**は、これを最も効果的になしとげるものにすぎない。なぜなら、私人の生活にも公的な課題についても何ら思案をめぐらすことなく、よりによっておよそ何ものにも役立たない議論を喜ぶものだからである。

なお訳者小池は、上記の*印の箇所に関して、次のように注記している。

キュニコス学派とその創始者アンティステネースへの言及。アリストテレス『形而上学』第5巻29章を参照。アンティステネースは前366年に没。「老齡を迎えて」という箇所は、彼がまだ存命中であることを示唆する。後出3節から、ゴルギアスはすでに物故していたとみられる。だとすると、本著作の執筆は前370年頃。プラトンの『パイドロス』とほぼ時期を同じくする。

また上記**印の箇所に関しては、訳者は「『ソフィストたちを駁す』1を参照。」と注記している。ここで注記されている箇所は、原文注記33. と同一であり、上述<注記と考察> (43) のとおりである。

- (73) ディオゲネース・ラーエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の2.62は、アイスキネース(アッティケー十大弁論家の1人)の章の一部であるが、そこに「その後アテナイに帰ってからも、当時プラトーンとアリストテレスの評判が高かったので、彼はあえてソフィスト(教師)として活動することはしなかったけれども、しかし聴講者には報酬を請求したし、…」とある。その65はアリストテレス(ギリシアの哲学者で快楽主義を標榜するキュレーネ学派の創始者とされる)の章の一部であるが、そこに次のように記されている。(加来彰俊訳、岩波文庫、上・中・下、1984年、89年、94年、に拠る)

アリストテレスは生まれはキュレネの人であったが、アイスキネースの伝えるところでは、ソクラテースの名声に惹かれて、アテナイへ出てきたとのことである。この人は、ペリパトス学派でエレソスの人パイニアスが述べているところによると、ソフィストとして活動していたのであるが、ソクラテース*のなかでは最初に謝礼を取り立てて、お金を師に送ったひとだということである。そしてあるとき彼は、20ムナのお金をソクラテースに送ったのであるが、その金はそのまま一度受け取り直すことになった。というのも、ダイモーンの合図がそれを受けとることを自分に許さないのだとソクラテースは言ったからである。つまりその贈物をソクラテースは快く思わなかったわけである。

同様にアリストテレスの章の80には、次のような記述がある。

彼がソクラテースのところを離れて、ディオニュシオスのもとに行ったことを非難した者がいたが、その人に対して彼は、「しかし、ぼくがソクラテースのもとへ行っ

たのは教養（パイディア）のためであったが、ディオニュシオスのところへは休養（パイディア）のために行ったのだよ」と答えた。

教えることによって金をもうけた彼に、ソクラテスが、「お前はどこからそんなに多くの金を手に入れたのかね」と言うと、「あなたが僅かしか手に入れられなかったところからです」と彼は答えた。

* 「ソクラテス」は訳における誤記で、正しくは「ソークラテース派の哲学者たち (τῶν Σωκρατικῶν, the followers of Socrates)」である。

また、6.14はアンティステネースの章の一部であるが、そこに次のように記されている。

すべてのソクラテス門下のなかで、この人（アンティステネース）だけをテオポノンポスは称賛して、彼は恐るべき才能の人であり、機知に富んだ会話によって、どんな人をも自分の思うままに導いたと述べている。そしてこのことは彼の書物からも、またクセノポンの『饗宴』からも明らかである。

また彼は、ストア派のなかの最も男性的な（厳格な）学派の開祖になったようにも思われる。…

なおディオゲネース・ラーエルティオスについては、本継続研究（7）Ⅱ．A．《原文注記》の〈注記と考察〉（1）を参照のこと。

(74) 『アンティドシス』262は、「争論的言論に長けた人びと」「天文学や幾何学やその他の学問研究に集中している人びと」を批判する文脈で論じられている箇所であり、下記のとおりである（小池訳）。

すなわち、世のたいていの人はその種の学びを駄弁や些末論議とみなしている。それらのどれも、私的な問題に関しても公共の事柄に関しても、まったく役に立たず、学んでみても憶えた先から忘れてしまうが、あまりに浮世離れしていて、実際の用の助けになるものでなく完全に日常の必要の外にあるからだ、と。

このような「世のたいていの人」の批判について、イソクラテースは続いて、自分の判断はこれに近いと述べつつ、「他方でまたその学問を賞賛する人びとも真実を語っていると思うのである。それゆえ、私の論は首尾一貫しないことになるが、…」と自説を述べていく。

(75) ここの叙述は、内容的に、《原文注記》35.に対応している。

(76) 『ヘレネ頌』では、まずアンティステネースとプラトーンの論が詭弁だとして批判の対象とされ、それは目新しいものではないとしてプロタゴラス、ゼーノン（前490年頃～前430年頃：エレア派の哲学者）、メリッソス（前490年頃～前430年頃：エレア派の哲学者）が挙げられ、4の叙述へと進む。その内容は下記のとおりである（小池訳）。

4 しかしながら、どのような主題についても偽りの論を組み立てることなどは、造作もないということが先人によってこれほど赤裸々にされたにもかかわらず、彼らは旧態然と月並みの話題に耽溺している。そのようなからくりは口舌の領域では反駁（ἐξελέγγεν, quibbles）に成功しているかのごとく装えても、行為の場面ではすでに長い時間にわたって反駁されている。彼らはかかる詐術を放棄して、真実の追求に励むべきであり、5…

なお、ἐξ-ελέγωは「反駁する」という意味をもち、ソクラテースの行為を象徴する ἐλέγωは「吟味する、試す、問い質す」「論駁する」などの意味をもつ。ソクラテースのこの語の用い方については、本継続研究(10) II. B. 5. の<注記と考察>(3)(4)(6)、及び同6. の<注記と考察>(5)、を参照のこと。

(77) 『パイデア』II, 39は、本継続研究(10) II. B. 7. に該当する。なお、ἐπιμέλειαには「配慮」「世話」「関心」といった意味がある。

(78) 指示されている『ソフィストたちを駁す』9の該当箇所は、小池訳では「政治弁論を教えると請け合う人びと」(もまた)、となっている。

(79) 『パイデア』II, 131, は、「6. ゴルギアース：政治家としての教育者」に該当する。

(80) 『ソフィストたちを駁す』9. は下記のとおりである(小池訳)。

以上の人びとのみならず、政治弁論を教えると請け合う人びともまた、批判にさらされてしかるべきである。実に彼らもまた真実をまったく顧慮せず、安い授業料とたいそうな宣伝によって、できるかぎり多数の者をかき集め、集めた者から少しでも金を取れば、それが技術の証であると考えている。当人はかくも鈍感で(ἀνασθητός, stupid)あり、しかも他人も自分たち同様の愚物だと思いこんでいるために、一介の素人が即興で行なうよりも稚拙な演説しか書けないにもかかわらず、彼らのもとで学ばば、議題に含まれる可能性を何ひとつ見落とすことのない一流の政治弁論家になれると約束している。

なお、ἀνασθητόςには「鈍感な」のほか、「感覚のない」「無関心な」「感じられない」などの意味がある。

(81) 『ソフィストたちを駁す』10. の前半は次のとおりである(小池訳)。

また弁論の能力を説いて、これにあずかるのは経験によるのでも、学習者の天性の素質によるのでもなく、弁論の知識は文字の知識と同じ方法で伝授されると彼らは主張する。

(82) 指示されている『ソフィストたちを駁す』12f.の該当相当箇所はやや長い。ここでは、その中から、16から17のはじめまでを以下に引いておく。

16ここに論が及んだ以上は、論旨をより明確に主張しておきたい。あらゆる弁論を組み立てる際に用いられる表現形式について言うならば、その知識を修得することは格別むずかしい事柄に属さない。むしろ、先に挙げた安直な約束をする人は避け、確かな知識をもつ人のもとで学ぶことが必要であるが。他方しかし、個々の主題に適用される表現法の中から、どれを選択し組み合わせて、配置の妙をつくすか、またさらに、好機を逸せず、適切に推論をくりひろげて演説全体を彩り、言葉を韻律にあわせ音楽的につらねて語るか、17 これらは綿密細心の配慮を必要とし、果斷と実際の判断に富む魂の仕事である。ここで学習者は…

(83) 原文注記で言われていることを理解するために、例示されているプラトーンの著作の中から『クラテュロス—名前の正しさについて—』の一部を以下に引いておく(岩波書店『プラトン全集2』1974年)。

ソクラテス 何も複雑なことではなくて、例えばこういうことだ。君も知っているように、われわれは字母を呼ぶのに、それぞれの字母の音そのもので呼ばないで、

名前をつけて呼んでいる。ただしエイ (e)、イエー (y)、オウ (o)、オー (o) の四つだけは別だがね。その他の字母には、君も知っているように、有声字〔母音字〕にも無声字〔子音字〕にも、他の文字を添加して、名前を作って、呼んでいるわけだ。しかしそれでも、われわれがその字母の力〔音価〕を名前に中に入れておいて、それ〔音価〕が明示されている限りは、その名前を呼ぶことは正しいのだ。なぜなら、それはその字母そのものをわれわれに示してくれるだろうからね。例えばベータ (beta) だ。ほらね、ご覧のようにエータ (e) とタウ (t) とアルパ (a) が〔bのほかに〕余分に付け足されているけど、立法者が表そうとし意図したあの字母の本性をこの名前全体でもって表わすことには、何の妨げもないよ。こんなにも彼〔立法者〕は文字に名前を立派につけるすべを知っていたのだねえ。

- (84) 『ティマイオス—自然について—』はほぼ全体がティマイオスの語りとなっているが、指示されている48b,56b,57cについて、該当箇所に必要な部分を下記に引いておく(岩波書店『プラトン全集 12』1975年)。

(48bの後段)

そこで、宇宙が生成する前には、火、水、空気、土の本性は、そのもの自体としては何であったのか、また宇宙生成以前にはそれらのものはどういう状態にあったのかを見なければなりません。というのは、いまのところまでは、まだ誰一人として、それらのものの生成を明らかにした人はないのでして、われわれは、火やその他いま挙げた各々のものが、いったい何なのかを、まるで聞き手が知ってでもいるかのように、これらを万有の構成要素(ストイケイア、字母)として、諸始原(アルカイ)などと言っているのです。

なお上記訳文の「字母」に次のような訳注が付されている。「字母、厳密には音節を構成する不可分の単純要素を意味するストイケイア(στοιχεῖα)がまた、事物の構成要素の意味で用いられている例は、『テアイトス』(201E~204B)にも見られる。この『ティマイオス』が、レウキッポス、デモクリトスの原子論を意識して書かれたかどうかについては、多々疑問が提出されているが、原子論者もまた、字母の比喩で原子を語ったという形跡はある(アリストテレス『形而上学』第1巻(985b5))。』

(56bの後段)

そこで、正しい言論に従うとともに、「ありそうな言論」の線を守るとすると、立体として生成させられたもので、正四面体の形をなすものが、火の構成要素(ストイケイオン)であり種子だということになります。そして生成の順序が第二番目のものを空気のそれだとし、第三番目のものを水のそれだと言うことにしましょう。

(57cの後段)

さて、まじりけのない、最初の物体はすべて、以上のような原因によって生じたのですが、それらのものの種〔火・空気・水・土の四種〕の内部に、また違ったいくつかの種類が生じていることの原因としては、構成要素(ストイケイア)〔となった三角形〕双方が組み合わされたその構成法を挙げなければなりません。つまり、…

- (85) 『ソフィストたちを駁す』12. は下記のとおりである。

私は、彼らが弟子を取るのを当然の権利としているのを見ると、不思議でならない。創作の仕事を扱って、固定した技術的規則をその手本にして、その愚に気づいていないのである。知らぬは彼らだけなのであろうか。文字は動かず同一の状態を保つので、われわれは対象が同じであれば同じ文字を使い続けることができるが、弁論の置かれた状況はそれとは正反対である。すでに他の人によって語られたことは、その後でなぞっても、前と同じような効果をもたらさない。この分野では、主題にじゅうぶん拮抗する議論を展開し、独創的な表現を発見する力のある者こそが、最もその巧みを謳われるのである。

(86) 『ソフィストたちを駁す』13の中の該当箇所は下記のとおりである。

両者の違いを示す最大の証拠を挙げよう。弁論は、時機にかなない (καιρῶν, fitness for the occasion)、適正 (πρεπόντως, propriety of style) と斬新さ (καινῶς, originality of treatment) とを兼ね備えなければ上手とはならないが、文字はそのようなことを何も要求されない。したがって、文字の学習を弁論の手本に持ち出すような人は、金を受け取るよりは支払う方が正当だろう。

(87) 上記 (43) に同じ。

(88) 『アンティドシス (財産交換)』2は、下記のとおりである (小池訳)。

もとより私は、一部のソフィストが私の仕事を譏って法廷弁論の代作屋とはやしていることを承知していた。あたかもアテネ女神の像を制作したペイディアスを「人形造り」と呼んでばからず、ゼウクスとパラシオスを「絵馬書き風情」と噂するにひとしい誹謗であったが、私はそれを今日まで黙殺してきた。

なお、「ペイディアース」(前490年頃～前417年頃)は、アテーナイ出身の彫刻家で、「古代全般を通じて最大の彫刻家と評されている。」ということである (松原著)。なお「ペイディアース」に関しては、本継続研究 (5) II. 3. の<注記と考察> (3)を参照のこと。「ゼウクス」(前430年頃～前390年頃に活躍)は「古代ギリシアで最も著名な画家」(小池訳書の注記)で、「アポッロドーロスの陰影画法 skiagraphia, σκιαγραφία を高度に発展させ、写実的な描出に成功、大いに名声を博した。」ということである (松原著)。「パラシオス」(前430年頃～前390年頃に活躍)は、小アジアのエペソス出身のギリシア人画家で、「好敵手ゼウクスとともにイオーニア派の巨匠。主としてアテーナイで制作し名声を得てアテーナイ市民権を与えられたらしい。作品は現存しないが、感情表現にすぐれた写実的描写のゆえに名を高め、特に輪郭線を描くことにかけては第一人者だとの定評があった。」ということである (松原著)。

(89) 指示されている『パイディア』II. 158f. は、「6 ゴルギアース：政治家としての教育者」の章である。

(90) 『ゴルギアース——弁論術について——』502c は、カッリクレースとの問答としてソクラテースが語っている部分で、b から d の前半までを確認すると、以下のとおりである (加来彰俊訳、岩波文庫)。なおカッリクレース (καλλικλής) は、「過激な自然主義的政治思想の主張者としてプラトンにより描かれているが、他の文献に出てこないで人物・生涯については不詳。」(岩波書店『プラトン全集 別巻』1978年)ということである。

ソクラテースでは、さらに、あの荘重で素晴らしい詩、悲劇の詩は、いったい、

何を目ざし、何のために真剣になっているのかね。それが真剣になって試みていることは、君の見るところでは、次のどちらだと思うかね。つまりそれは、観客を喜ばせるということだけかね。それともまた、観客にとって、何かが快いことであり、気に入られているとしても、それがためにならぬ悪いことだとすれば、そのことは言わないようにとし、他方、もし何かがたまたま不快なことだとしても、有益であれば、観客が喜ぼうと喜ぶまいと、そのことはせりふでも言うし、合唱隊でも歌うように、あくまでも頑張り通すということもするのかね。悲劇の詩が心がけているのは、そのどちらのやり方であると君には思われるかね。

カルリクレス その点は明白だよ、ソクラテス。むしろ快楽のほうへ、つまり、観客を喜ばせることのほうへ、それはすっかり傾いてしまっているのだ。

ソクラテス それなら、カルリクレス、そのようなやり方こそ迎合であると、ぼくたちは今しがた言っていたのではないか。

カルリクレス たしかに。

ソクラテス さて、それでは、もしひとがどんな種類の詩からでも、節（メロス）とリズム（リュトモス）と韻律（メトロン）とを取り除いてしまえば、あとに残るのは、ただの言葉だけではないかね。

カルリクレス それにきまっている。

ソクラテス そうすると、それらの言葉が、群れつどう大勢の民衆に向かって、語られているわけではないのか。

カルリクレス そうだ。

ソクラテス してみると、詩を作るということは、一種の大衆演説だということになるね。

カルリクレス そうなるようだ。

ソクラテス しかもそれは、弁論術の技巧をこらした大衆演説だということになるだろう。それとも君には、詩人たちは劇場において、弁論術の技巧を使って話しているように想われないかね。

カルリクレス それは、そう思われる。

(91) 『ソフィストたちを駁す』 1. は、上記 (43) と同じ。

(92) 『パイデア』 II, 59f. は、第2章「ソクラテスの思い出」の中の「教師としてのソクラテス」の節である。

(93) 『ソフィストたちを駁す』 1と8. は、上記 (43) (71) と同じ。

(94) 『ソフィストたちを駁す』 14. は下記のとおりである。

しかしながら、他を非難攻撃するだけでよしとせず、私自身の所信を明らかにする義務もあるとするならば、私はすべての思慮にすぐれた人の賛同が得られると考えている。哲学した人の多くは生涯を私人として送るのに対して、いかなるソフィストとの交際もなくして、言論と政治とのいずれにおいても頭角を現わす者がいる。というのも、言論だけでなく他のあらゆる活動において能力は、天性の素質と熟練のうちに生じるものだからである。

(95) 『ソフィストたちを駁す』 15. は下記のとおりである。

教育は、経験を厭わない秀才の技術を磨き、よりすみやかに方途を見つけ出すこと

を可能にするにすぎない。これら逸材を相手にするならば、彼らがいま模索しながらたまたま見つける解決策を、着実にとらえることを教えることができるが、才能の劣る者を教えても闘いの巧者や言論の作り手に育成するのは至難の業であって、ただ以前の自分よりも向上させ、多くの点で思慮もすぐれた者にすることができるだけである。

- (96) 『ソフィストたちを駁す』 16. は下記のとおりである。

ここに論が及んだ以上は、論旨をより明確に主張しておきたい。あらゆる弁論を組み立てる際に用いられる表現形式 (ιδεῶν, the elements) について言うならば、その知識を修得することは格別むずかしい事柄に属さない。むしろ、先に挙げた安直な約束をする人は避け、確かな知識をもつ人のもとで学ぶことが必要であるが。他方しかし、個々の主題に適用される表現法の中から、どれを選択し組み合わせて、配置の妙をつくすか、またさらに、好機を逸せず、適切に推論をくりひろげて演説全体を彩り、言葉を韻律にあわせ音楽的につらねて語るか、これらは綿密細心の配慮を必要とし、果断と実際の判断に富む魂の仕事である。

- (97) 『ソフィストたちを駁す』 17. は下記のとおりである。

ここで学習者は、素質に恵まれていることを必要とするだけでなく、表現の種類についてはこれを学び、その実際の適用については訓練を怠ってはならない。他方、教授者は精確に説き明かして、教えの可能なことは何ひとつ省いてはならず、自余のことについてはおのれを模範として示すならば、その跡を追い、巧みにまねることのできる者はすぐにも、よそには見られない文辞の華麗と雅味を体得するであろう。

- (98) 『ソフィストたちを駁す』 18. は下記のとおりである。

そしてこれらの条件がすべてそなわったとき、哲学する人は完成の域に達するであろうが、いま挙げた条件のどれかが足りないときは、哲学に親しんでも、必ずや劣った状態に低迷せざるをえないだろう。

- (99) 『国家』 473d は、ソークラテースがグラウコンと対話を交わしているパートで、下記のようなソークラテースの発言である (藤沢令夫訳、岩波文庫、上)。

「哲学者たちが国々において王となって統治するのでないかぎり」とぼくは言った、「あるいは、現在王と呼ばれ、権力者と呼ばれている人たちが、真実にかつじゅうぶんに哲学するのでないかぎり、すなわち、政治的権力 (δύναμις τε πολιτική, political power) と哲学的精神 (φιλοσοφία, philosophic intelligence) とが一体化されて (ξυμπέση, a conjunction)、多くの人々の素質 (πολλὰ φύσεις, the motley horde of the natures) が、現在のようにこの二つのどちらかの方向へ別々に進むのを強制的に禁止されるのでないかぎり、親愛なるグラウコンよ、国々にとって不幸のやむときはないし、また人類にとっても同様だとぼくは思う。…

- (100) 『法律』 712a は、アテナイからの客人がクレイニアスと会話している箇所であり、その前半は下記のとおりである (森進一、他訳、岩波文庫、上)。

…つまり、一人の人間において、最大の権力 (ἡ μεγίστη δύναμις, the greatest power) と、思慮 (φρονεῖν, wisdom) や節制 (σωφρονεῖν, temperance) の働きとが落ち合って一緒になる (ξυμπέση, coincides) とき、そのときこそ、最善の国制

と最善の法律の誕生が芽生えてくるのであって、それ以外の方法では、けっして生じてはこないのです。

- (101) 『国家』485bff. は、哲学者の資質をめぐって、ソクラテースとグラウコンとの対話が続いていく箇所、イエーガーが指示しているのは487a までだと判断される。ここでは、487a のソクラテースの発言を引いておく (藤沢訳、岩波文庫、下)。

「では、哲学がこのような仕事であるとすれば、君はこの仕事に対して、一点の非難の余地でも見出すことができるかね？それは、生来の自然的素質において (φύσει, by nature) 記憶がよく (μνήμων, of good memory)、ものわかりがよく (εὐμαθής, quick apprehension)、度量が大きく (μεγαλοπρεπής, magnificent)、優雅で (εὐχαρις, gracious)、真理 (ἀληθείας, truth) と正義 (δικαιοσύνης, justice) と勇氣 (ἀνδρείας, bravery) と節制 (σωφροσύνης, sobriety) とを愛して、それらと同族の者でないかぎり、けっしてじゅうぶんに修めることのできないような仕事なのだ」

「モモスでさえも」と彼 [=グラウコン] は言った、「そのような仕事にけちをつけることはできないでしょう」

「よろしい」とぼくは言った、「それなら、そのような人間が教育 (παιδεία, education) を積み年齢が長じて完成されたならば、君はそのような人々にのみ、国を委ねることだろうね？」

なお、イエーガーの論述の趣旨とは離れるが、上記のソクラテースの発言中の「真理と正義と勇氣と節制とを愛して」、と日本の教育本法 (1947年 3月) 第1条 (教育の目的) の「…真理と正義を愛し…」との照応に関しては、(道) 徳性の本質理解の問題として、別途論及する。

- (102) φιλόσοφος φύσις (the philosophical nature) を、藤沢訳を参考にして、「哲学者たちの自然的素質」と訳しておいた。

- (103) 上記 (98) に同じ。

- (104) 指摘されている『ソフィストたちを駁す』17の ψυχὴ δοξαστική は、次のような一文である。

ψυχῆς ἀνδρικήs καὶ δοξαστικῆs ἔργον (the task of vigorous and imaginative mind、小池訳：「果敢と實際的判断に富む魂の仕事である」)

なお δόξα は「(主観的な) 考え」「意見」「判断」「憶断」「評判」などの意味をもち、δοξάζω は「思う」「推量する」「思いなす」などの意味を、また δοξαστικός は「δόξαにかんする」「表面的にそう見えるだけの」「憶断的な」「判断をする」「想像力の豊かな」などの意味をもつ。

- (105) イェーガーは、弁論術の多くの「模範演説」が資料としても伝えられてきているが、パイダイアーの思想史的な意義深さにおいて、考察の対象をイソクラテースに焦点化すると表明してきている。本章 (「2 イソクラテースの弁論術とその教養理念」) の冒頭 (本継続研究 (11) のⅢ. 1) では、「その対抗 [= 哲学と弁論術の、それぞれに教養のよりよい形態であると主張する対抗] のすべての局面を述べることは不可能である：第一には、それはかなり反復が多く、またその対立の側の主唱者は、いつも非常に興味深い人物であるというわけではなかった。」と説明している。また英訳版第Ⅱ巻の

序文 (本継続研究 (3) II. 4. <訳文④>) では次のように述べている。

…あの時代から生き残ってきているすべての書物が、それら全部の中に教養の観念 (the idea of paideia) がどのように意識的に生き、それらの形式 (form) を支配しているかを示すために、この研究において論じられる。このことの唯一の例外は、法廷の雄弁術である。その非常に多くのものが伝えられてきているけれども、それはここでは単独には扱われない。そのことは、それが教養 (paideia) と何の関係もないという理由からではないのであり、というのはイソクラテースとプラトーンはしばしば、リュシアースとその同僚たちは高等教育の代表者であると主張した、と述べているのである。そのこと理由は、政治的弁論術がすぐに、法廷の (juridical 裁判の) 弁論術 (rhetoric) の教師たちによってなされた仕事の影を薄くさせたということである。弁論術の両方の分野を詳細に扱うことは、資料が非常におびただしいので、実際的にも望ましくもないであろうし、実際にイソクラテースとデーモステネースは、法廷弁論 (court-speeches) を書いた者たちよりも、よりつよい印象を与える雄弁家なのである。

- (106) 指摘されている『ソフィストたちを駁す』19-20は、下記のとおりである (小池訳)。
19近年に続々と発生し、大言壮語に唱和してまだ日も浅いソフィストたちが、いまは奢りをきわめても、いずれはすべて、この基本に引き戻されるだろうことを私は疑わない。残るは、われわれより前の時代にあつて、いわゆる「技術」の書を世に問うたソフィストたちであるが、これを批判せずに放免するわけにはいかない。彼らが約束したのは、「法廷弁論」という忌まわしい名前を選び出して、それを教えることであつた。これは言論を憎む者のすることであつて、言論の教養教育の第一人者が手を染めることではない。

20ましてこの教養のはたらきは、法廷弁論よりもむしろそれ以外のあらゆる言論を益する力をもっている。彼らは論争に忙殺されているソフィストたちと比べても、はるかに劣る。たしかに後者にあつては、その終始するところの議論は抹消的で、これをひとが行動に移せばたちまちありとある災いに落ちるような性格のものではあるが、しかし教えの表看板に徳 (ἀρετήν, virtue) と克己節制 (σωφροσύνην, sobriety) を掲げている。対して彼らは、政治弁論 (πολιτικούς λόγους, political discourse) を呼び物にしながら、これに附随する他の善 (ἀγαθῶν, the good things) をすべて無視して、他人に干渉し財産をつけねらうことを教える者とみなされたのであつた。

なお訳者は、19の「われわれより前の時代にあつて、いわゆる「技術」の書を世に問うたソフィストたち」に、「コラクス、テイシアス、プロタゴラス、ゴルギアスなど。」と注記している。

- (107) 指示されている『ソフィストたちを駁す』21. は下記のとおりである (小池訳)。
しかしながら、この哲学が課している本来の指令に従おうとする者は、雄弁よりもむしろ品性の涵養の点ですみやかに益をうけるだろう。ここで私が正義は教えられるものと主張していると誤解してはならない。一般的に言って、生まれつき徳の素地が劣悪な者に克己節制や正義を植えつける技術はどこにもない。とはいえしかし、徳に向けて何よりの励みとなり助けともなるのは、思うに、政治的弁論を修め

ることであろう。

Ⅲ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑥ ～継続研究 (12) における～

〔Ⅲ. の趣旨について：イェーガーは『パイディア』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている（本継続研究 (3)、Ⅱ. 第1章<訳文①>）。イェーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイディア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイディア』研究の一環として記してみようと思う。〕

ここでは、勝田守一の教養論の意味を正確につかむために、『能力と発達と学習——教育学入門1』（国土社、1964年）の後段の三か所に目を向けておく。⁽¹⁾

勝田は、教育科学研究運動のリーダーとしての役割を果し続け、その諸論考も、ときどきの必要に応じていくものであった。そのような研究人生において、『教育学入門Ⅰ』と『政治と文化と教育——教育学入門Ⅱ』とは、勝田が自ら構想をもって執筆し続けており、勝田の教育学の思想的根幹を明確に示すものとなっている。その構想は、『教育学入門Ⅰ』において、次のように明確に示されている（「序章 未来にかかわる時点で」の末尾）。

- 第1章 人間の能力をどうとらえるか
- 第2章 人間が成長するとはどういうことか
- 第3章 人間の学習を指導する条件はなにか
- 第4章 能力の発達と人間的価値の実現
- 第5章 教育における諸権利はなにを意味するか
- 第6章 教育は社会の歩みとどうかわるのか

その序章そのものは、「子どもと世界の未来にかかわる時点において。」ということばで結ばれており、そのあとに、「第5・第6章は、続刊『政治と文化と教育——教育学入門Ⅱ』として、国土社から刊行される。」と注記されている。そうして『教育学入門Ⅰ』の「まえがき」では、「いまは続編（『政治と文化と教育』）の仕事の整備に心を向けなければならない。」との身構えを示している。

その『教育学入門Ⅰ』と『教育学入門Ⅱ』において、勝田の教養論（＝パイディアの考察）は、両者を媒介する位置を占めている。ここでは、『教育学入門Ⅰ』の中の三つの論述箇所を検討の【資料】として掲載するが、以下の二点に目を向けておきたい。

第一に注目したいのは、勝田の「教養」の定義である。

勝田は【資料-10】において、「…このたたかいは、子どもたちの祖先が作り出した文化の基本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力を必要とする。

その能力を私たちは真の意味において「教養」と名づけてよいと考える」(187p)と「教養」を定義している。さらに【資料-11】においては、「子どもたちの祖先が作り出した文化の基本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力……(それを)私たちは真の意味において『教養』と名づけてよいと考える」(189p)という自身の「教養」定義を引きつつ、論述を進めている。

勝田はここで「支配する」というタームを使っているが、⁽²⁾この「支配する」を、勝田はギリシア語の ἄρχω (アルコー) の思想的意味を念頭に置いて使っているであろう。この ἄρχω には、①「始める」、②「指揮する、支配する」という二つの意味があり、名詞形 ἀρχή には①「初め、起源」、②「支配権、支配」という意味がある(それぞれの意味に対応する英語は① origin、② control ということになるだろう)。プラトーンはとくに「正義」を、「自らが自らをよく支配すること(アルコー、control)」という意味で、つまり「自らが自由な主体となる」という意味で論じている。したがって、「自由」(ἐλεύθερος エレウテロス, be free) の対抗概念は「隷属」(δουλεία ドウレイアー, slavery) ということになる。プラトーンはこの「正義」の考察を、個人の内的世界(魂)と国家(都市国家)とを相関させて論じている(対話篇『国家——正義について——』)。古代ギリシアの時代も今日も、人間の实状は、多次的な多くのことから支配され、隷属させられている(= 真の健康さ = 真の自由を失う) 状況にある。⁽³⁾

つまり勝田は「支配する」ということばを、このようなギリシア思想を素養としてもちつつ、勝田自身のことばとして、「一人ひとりが、先行する歴史的な文化を深く学びとり、自己と社会・文化との双方の、真に自由な、個性的な創造主体となっていく」という意味合いで用いていると判断される。

第二に注目しておきたことは、勝田がフランスの物理学者ポール・ランジュヴァン(1872~1946)の教養思想とイエーガーの『パイディア』とを関連させて考察していることである。

勝田は、『教育学入門1』の第四章(「2 教養と教育実践」)において、日本社会の歴史における「教養」の問題はどうであったかを概括し、次のように述べている(196p)。

なるほど昔の日本人は「教養」ということばを用いなかった。しかし、日本人が、それぞれの時代に、たとえば貴族社会や武士の社会がある理想的な、あるいは典型的な人物の行動や性格を規定する内的な価値を知らなかったのではない。⁽⁴⁾しかし、それが統一的な概念として結晶し、反省と努力の対象とされることはなかった。その必要も感じられなかった。とくに重要なことは、特定の身分や職業に即して訓練の目標が明確にされたが、「人間」を形成するという教育の思想はわが国では希薄であったことである。

この文章中の「反省と努力の対象とされることはなかった」という指摘は、イエーガーのパイディア研究を念頭に置いていると判断され、教養・教育論として重要である。⁽⁵⁾勝田はさらに、ランジュヴァンの、「職業が人間を孤立化させるものならば、教養は互いに接近させるものです。」(【資料-12】)という思想に光を当て、⁽⁶⁾「教養」思想によって明確にされていくべき課題を三つに整理し、改めて「…労働、とくに肉体労働が身分の低いものの重荷とされ、武力や知力が支配階級的能力とされる社会では、特定の生産労働のための準備、特殊技能の訓練は、民衆のすべてにとって当然のこととされ、それはとくに教

育的反省の対象とはならなかった。」(【資料-12】)と述べている。ここでも勝田は、「とくに教育的反省の対象とはならなかった」という観点を重視している。勝田は、このような文脈で、「かれ [=イェーガー] は、教育が人間の形成として自覚的にとらえられたのは、単なる生産技術の訓練や日常道德のしつけを超えて、統一的な内的価値に意識が向けられたときにはじまるものだ、とっている。そして、それを人類最初に自覚したのがギリシア人であり、かれらはそれをやがて教養とよんだとっている。」と述べ、そのままP. ランジュヴァン (1872年～1946年；フランスの物理学者) の思想に連続させ、「パイデアアというギリシア語が、ローマ人によって、フマニタス (humanitas) と訳され、「人間的なもの」という意味を担うにいたったのは必然的であった。ランジュヴァンがとくに「教養は……ヒューマニスト的である」とことさらにいったのには、これだけの背景が厳として存在しているのである。」と述べている。

【資料-10】

勝田守一『能力と発達学習——教育学入門1』(国土社、1964年)：「第三章 人間の学習を指導する条件はなにか」の「12 科学への要求」の末尾の一段落より

現代の社会、つまり子どもたちがそこで生活する社会は、知識と技術とによって機械や器具や施設やそしてもっとだじな社会的諸関係や世界への感応の仕方を、一般に「文化」とよばれているものとして所有する社会である。この社会は子どもたちにとって、その生活の母胎である。父母たちが、そして民族が、そこで生まれ、「文化」を創り出し、維持してきた社会的生命の土壌である。しかし、そこではすべてが子どもたちを快く迎えるのではない。子どもたちはそこで、この社会の諸面とたたかわなければならない。たたかいは、社会を自分と民族の生活の真の母胎とするためである。このたたかいは、子どもたちの祖先がつくり出した文化の基本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力を必要とする。その能力を私たちは真の意味において「教養」と名づけてよいと考える。国民のこの内的な能力の構造を明らかにすることが私たちの次の課題となるだろう。

【資料-11】

同上に直接に続く「第四章 能力の発達と人間的価値の実現」の「1 国民的教養」の冒頭より (抜萃)

国民的教養ということばには、手垢がついている。主として「教養」ということばに付着している偽善と非現実がまんがならないというひとがある。

しかし、それはことばの罪であろうか。またことばは、私たちの現在の問題にかかわりなく使用済みとして、棚上げしておいてよいものでしょうか。また、このことばなしに、私たちは別のことばで、十分に私たちのたいせつにする人間としてのある価値をあらわすことができるだろうか。さらに、自分の立場から、このことばをボイコットしたとして、他の人々がこのことばを用いて逆に説得を強化するということはないだろうか。

もちろん、私たちはことばを問題にしているのではなく、特定の価値自体をとりあげているのはいうまでもない。私が「子どもたちの祖先がつくり出した文化の基

本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力……（それを）私たちは真の意味において『教養』と名づけてよいと考える」といったとき、そのことをどうとらえるのかが、私たちの一つの課題となるだろうということなのである。

… (中略) …

人間が外界からの刺激に対して反応する仕方は、その内部の複雑な条件によって規定される。この相互作用という自然の基本的な存在形式は、人間のばあいには、高度の精神生活の本質的なすがたとなつてあらわれている。生物としてすでに動物は、腹の満ち足りているときと、餓えているときには、同じ対象（たとえば植物や他の動物）が目に見えても、行動は全くちがってあらわれる。さらには条件反射のメカニズムの形成のちがい、別のことばでいえば過去の経験のちがいによって、同種の動物も、いや同一の動物さえもが同じ刺戟に対して異なった反応の仕方を示す。

この点、人間においてもいささかも変わりはない。腹が空いているときの食物に対する態度、渇きながら山道を歩いているとき、私たちの水のせせらぎを感受する強さ、すべて、内的な条件によって特殊な反応を示す例である。

しかし、人間はさらに精神的な態度で、もっと高度な内的条件の影響を示す。個性的な思考や感受性、そして外的行動の基底がそこに見出される。なにに、どのように注意を向けるかも、また内的条件によって規定される。⁽⁷⁾

… (中略) …

内的条件は、しかしすべてが先天的に決定されているわけではない。ここでも素質と環境という問題に私たちは、立ちかえる。私たち人間が、一定の振動数の範囲内の音波しか感受できないのは、人類という生物の有機体的構造によって規定されている。五官といわれる外官以外に、私たちは外界からくる刺戟を感受し、意識することはできない。犬やその他の動物が私たちとちがった世界像を意識的に所有しているかどうかはわからないが、色や音の世界にしても、ちがっていることだけは確かであろう。

この条件を私たちは、経験と意識的な学習とによって、豊かにも貧しくもしてしまうのである。音楽家が、私とちがった音楽の内的世界を所有していることはたしかである。音楽家は、同じピアノの演奏をきいても、演奏家はその曲について他のひととちがった解釈をしているかどうかをとらえ、その微妙な差異に感応するだろう。しかし、私にはそれができない。農民は、イネの葉の色をみて、イネの生命がいまどんな状態にあるかを的確に理解するだろう。しかし私にはそれが不可能である。

この内的条件の豊かさと貧しさ、このこととかわりをもつものとして、私たちは教養という概念をとらえなくてはならぬと思う。

【資料 -12】

同上「第四章 能力の発達と人間的価値の実現」の「3 現代と教養」の全文である。なお勝田が引用している竹内良知・新村猛訳『科学教育論』（明治図書、1961年）は、Paul

Langevin: *La Pensée et L' Action*. — *Textes recueillis et présentés par Paul Laberenne*. 1947. の訳である。以下の掲載訳文に挿入したフランス語は、1950年版のものに拠る。

フランスの民主的な教育計画の一つにランジュヴァン・プランと名づけられているものがある。これは第二次世界大戦末期、ナチ・ドイツの軍事的支配とそれに協力するファシズム政権に対して解放をたたかったフランスの教育関係者たちが、指導的物理学者ポール・ランジュヴァンを委員長として、解放の日にならぬ新しい民主教育をフランスに打ち建てようとしてアルジェ・プランをつくりあげたことに端を発している。ランジュヴァンは物理学者であったが、また大戦前から教育改革に熱心な努力を続けてきたひとりであった。そのことばに次のようなものがある。

「職業は人間を、その専門の枠の狭い内部だけに、とじこめるべきではありません。教養 (la culture) はこのような傾向を是正するものです。職業 (la profession) が人間を孤立化させるものならば、教養は互いに接近させるものです。もともと教養は、人間全体に関係するという意味で、つまり、人間のさまざまな能力の間に (entre ses diverses facultés) 均衡 (un équilibre) を実現しようとする意味でヒューマニスト的 (humaniste) であります。教養は個人にとっては、生業の機械的行動や社会的拘束にたいして、人間味を失わないための手段であります。生業へのどんな準備よりも大切なのは、それぞれの子どもが教養を身につけること⁽⁸⁾でありましょう。」(参考文献①の153ページ)

これに続いてかれは、「わが国の人民に必要なのは、まず教養を一般化すること、科学の最高度の研究が与える利益に浴するという⁽⁹⁾可能性は、今日まできわめて多くのばあい、少数者の特権だったのである」というコニオのことばを引いてこれに賛意を表している。

しかしこのような教養、「人間全体に関係するという意味で、つまり、人間のさまざまな能力の間に均衡を実現するという意味でヒューマニスト的」である教養は、どういう仕方で現実のものと考えられるのだろうか。

私たちは、そこで次の三つの問題を追求しなくてはならない。第一には、現実的に要求される職業的準備と教養とはどのような関係をもっているのか。第二には、教養、すなわち「能力の間に均衡を実現する」教養とはどういうことなのか、そしてそれを私たちの問題意識に即していえば、統一的な人間の内的条件の形成はどういう過程としてとらえられるのか、第三には、教養という概念は全面発達という思想あるいは概念とどうちがうのか、またどのように関係するのか。この三つの問題にとりくむのが私の以下の仕事になる。

第一、人間は労働から解放されることはできない。しかし、また社会的労働が人間を人間へと変化させたのである。この労働は、労働への、すなわち社会的には職業への準備を、その若い時代の学習に課している。労働、とくに肉体労働が身分の低いものの重荷とされ、武力や知力が支配階級の能力とされる社会では、特定の生産労働のための準備、特殊技能の訓練は、民衆のすべてにとって当然のこととされ、それはとくに教育的反省の対象とはならなかった。

ギリシアの教育的理念について、ヨーロッパ的思考の伝統に立って、イエーガーという古典学者はすぐれた研究を展開している。かれは、教育が人間の形成として自覚的にとらえられたのは、単なる生産的技術の訓練や日常道徳のしつけを超えて、統一的な内的価値に意識が向けられたときにはじまるものだ、といている。そして、それを人類最初に自覚したのがギリシア人であり、かれらはそれをやがて教養とよんだといている。パイデアパイデアということばは、最初は、「子どもを養い育てる」というほどの意味であったが、ギリシアの社会と人間の探究者たちは、統一的概念として、教養という意味に使用するようになったといわれる。

この見解は、ある意味で正しい。というのは、教養を一方では、直接的な政治的・軍事的権力の支配からときはなし、他方では日常的に有効な孤立した技能から区別しながら、人間的なものの内実としてとらえたのは、やはりギリシア人だからである。パイデアというギリシア語が、ローマ人によって、フマニタス (humanitas) と訳され、「人間的なもの」という意味を担うにいたったのは必然的であった。ランジュヴァンがとくに「教養は……ヒューマニスト的である」とことさらにいったのには、これだけの背景が厳として存在しているのである。

しかし、教養の思想は、非政治的であり、いわゆる文化主義的であろうか。これが私たちの問題である。日本の大正期の教養主義者たちは、教養を文化主義的概念として、非政治的にとらえ、ある意味で矮小化してしまった。じつはギリシア人がパイデアの自覚に達しなればならなかった状況はまさに政治的であった。ルネッサンスの「教養人」の思想は、ルネッサンス的政治状況とかかわりを深くもっている。この問題を追求しないで、教養の概念を使用することを私たちは避けなければならない。

しかし、ここでは、この問題の追求をあとにまわして、まず第一の問題である職業準備の学習と教養の意味のかかわりに立ちかえろう。

[参考文献]

- ①ランジュヴァン『科学教育論』(竹内・新村訳) 明治図書
- ② Jaeger, W. : Paideia, Band I.
- ③ Marrou, H.I. : Histoire de L'Éducation dans L'Antiquité.

<注記と考察>

(1) 本継続研究では、すでに下記のような、勝田論考の資料掲載と資料引用を行なっている。

- ・本継続研究(7) III. 【資料-4】「西洋教育史の古典について」、【資料-5】「人間形成と数学教育」
- ・本継続研究(9) III. β 「加藤周一の「現代と神話」(「夕陽妄語」: 朝日新聞2008年2月23日) とイエーガーの『パイデア』、そして勝田守一の『能力と発達と学習』

(2) 「支配する」というタームをこのような教養・教育論の文脈で用いることは、勝田に固有のことである。

(3) 「アルコール」の理解については、拙論「世界にかかわって生きることと内的なものへの

憧憬と——社会教育・生涯学習の哲学を考える——」(畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学—生活のなかで感性と知性を育む』(学文社、2007年、所収)の「3. 教育・文化の思想——古代ギリシア思想から学ぶ」の「(2) プラトーンの「正義」論」(27 p)、および拙論「ヒューマニティの思想の現代性について——ギリシア的パイデアー(教養)の再生を考える——」(教育科学研究会編集『教育』2008年2月号、所収)の「三、パイデアーの観念について——ソクラテース・プラトーンによる人間研究」の「正義について——自由な主体となること」(108p)、を参照のこと。

- (4) 勝田の指摘に関連してということであるが、新渡戸稲造の『武士道』の意義をどう考えるかについては、同上の拙論20 p と注記 (30) を参照のこと。
- (5) 『教育学入門 I』は、「教育科学研究会の機関誌『教育』に一年有余にわたって連載された文章を再録して一冊にまとめたもの」(「まえがき」)で、出版は1964年である。それに先立つ「イェーガーの《パイデア》」(『勝田守一著作集 6』国土社、1973年、所収)は、1962年のものである。勝田は、その「1 問題提起」の章に、下記のような問いを記している。

Jaeger はドイツ人として、自分たちを hellenozentrischer Kreis に属する民族としてとらえている。かれは、ギリシア以前の、そしてギリシアに多くの遺産を与えた東方の先進的諸民族とギリシア民族との差異を、ギリシア民族と、その文化の Kreis (地圏) に属する現代人との差異よりも大きいとしている。それは西欧的人間にとってはなにを意味するのか。これを私たち、アジアの人間はどのようにとらえたらよいのか。そのことは、私たちが西欧文化を撰取することとどのような関係をもつのか。

- (6) P. ランジュバン「教養と人文科学」1944年(『科学教育論』明治図書、1961年、所収)。なおランジュヴァンは、その続きで下記のように論を展開している。

われわれが留意すべきことは同様に、知識のあらゆる部門やあらゆる研究分野を、教養的な品位にまで (à la dignité culturelle) 高めることであります。教育のあらゆる段階とともにあらゆる部門に、最も高度のヒューマニストの見地がゆきわたるようにしたい、というのがわれわれの願望であります。きわめて技術的な領域、きわめて手工的な活動に至るまで、教養的価値 (sa valeur de culture) をもたないものはありません。人間の手の働きが頭脳の働きをつくりだしたことを、忘れないようにしましょう。思考は行動から生じるもので健康な (sain) 人間にあっては、行動にたちかえらるべきものであります。

なおランジュヴァンは、「1945年3月3日の盛大な顕彰式典」で、次のように発言している。

真の「科学」(Science) と高い教養〔文化〕(culture) の恵みに万人を浴させることは可能であるとともに必要であるという深い信念に促されて、私はずっと前から教育の問題に立向かうようになり、こんにち、私の健康状態が許す限り精を出して、わが国の教育を真に民主的で人間的な (démocratique et humaine) 基礎の上に築きあげるといふ、大きな任務に参加する光栄を得たのであります。学校における正義 (la justice à l'école) は、社会正義 (la justice sociale) * の必要条件でありまして、これこそ正義と科学とを結びつける緊密な絆であります。ミネルヴァを人

類の努力のこの二側面に共通の女神としたギリシヤ人は、これによって確かに、一方が他方なしではやってゆけず、「科学」によって創造された行動手段がひとえに「正義」に奉仕しない限り、人類が苦しむということを、示そうと欲したのであります。

*『科学教育論』では「社会主義」となっているが、誤植と判断し「社会正義」とした。

参考までに、「『教育の改革』に関してランジュヴァン委員会から文部大臣に提出された答申 1947年7月(通称「ランジュヴァン＝ワロン改革案)」の「第1 序説」の「1、一般原則」は次のように書きだされている(国立国会図書館調査立法考査局『フランスにおける教育改革の動向と問題』1960年、6月、に拠る)。

われわれの教育の完全な再建は、少数の基礎的原則の上に立つ。そしてただちに、あるいは比較的長い時日を予期して企画されるであろうあらゆる措置は、この原則の適用でなければならない。

第一の原則は「正義の原則」Principe de justice であるが、それはその固有の価値とその結果の豊富さによって、他のすべての原則を支配するものである。

(7)勝田はここで「なにに、どのように注意を向けるかも、また内的条件によって規定される。」と述べている。ところで戦前日本の唯物論者である戸坂潤(1900～1945)は、その「教育と教養」(1936年、『戸坂潤全集 第4巻』勁草書房、1966年、所収)において、「何に、どこに、関心を持つかは教養の兆候だ。」と述べている。この両者の意味を、プラトーン(『国家』)、アリストテレス(『ニコマコス倫理学』)、ルソー(『エミール』)の思想との本質的関連のなかで考察しようとしたものとして、拙論「『人間』への問いと地域文化の創造——ギリシア思想の継承を考える——」の「2. 2『教養』の本性と教育の原理」の章(『都留文科大学社会科学部編著『地域を考える大学——現場からの視点——』日本評論社、1998年、所収)を参照されたい。また戸坂潤の思想研究に関しては、本継続研究(5)のⅡ. 4. 「素人(layman, Laien)と『専門家たち(professionals, Fachleute)』の区別の現れ」の<注記と考察>(1)で説明している。勝田を含む、これらの思想家たちは、人間人格、(道)徳性の本質について、したがってその育みのことについて論じている。私たちは、(道)徳性の「評価」可能性をめぐる論議以前に、この人間の内面の資質の成り立ちを、今日の理論・実践として、瑞々しく問い直していかなければならない。

(8)『科学教育論』ではここに、「ができるようにしてやること」の語句が入る。

(9)『科学教育論』ではここに、「可能性をあらゆる知性に一般化することであろう。この」の語句が入る。

Received : September, 17, 2018

Accepted : November, 7, 2018